

同志社出身の初期ハワイ伝道者の足跡

飯 田 耕 二 郎

はじめに

一、回想記録にみるハワイ伝道の位置

二、同志社在籍の記録

三、出身地および渡航まで

四、渡航以後の活躍

むすび

はじめに

同志社出身者で海外において活躍した人物は少なくない。しかし、大久保真次郎、原田助、牧野虎次など、一部の人物を除けば意外とその活躍ぶりが同志社内においても知られていないのではなからうか。⁽¹⁾筆者はさきに、「移民の先駆・星名謙一郎の生涯」⁽²⁾と題する小稿をまとめた。彼は同志社出身ではないが、明治・大正期に、ハワイ・テキサス・ブラジルなどで活躍する。とくにハワイにおいては、彼は組合教会派の牧師とキリスト教の伝道に従事する。それは明治二〇年代のことであり、ちょうどその頃、同志社からもハワイに渡りキリスト教の伝道に従事し、初期の日

本人移民社会の中で活躍した人達がいたのである。彼等を嚆矢とし、その後、数多くの同志社出身の伝道師、牧師達がハワイに渡航した。

ここでは、明治二〇年代、最初にハワイに渡った数人についての足跡を海外で活躍した数多くの同志社出身者の一事例として紹介したい。しかし、彼等に関するまとまった記録はもとより無い。一応、彼等の出身地にも足をのばして調べてみたが、彼等は出身地において活躍した人物ではないので、ほとんど記録は残されていない。忘れられた人物達なのである。ここでは断片的な資料を寄せ集めたにすぎないため、彼等の活躍ぶりの一端でもうかがえたらと思う。

(1) たとえば、『同志社百年史』をみても、海外における同志社出身者の活躍ぶりは、ほとんど記されていない。

(2) 拙稿「移民の先駆・星名謙一郎の生涯」(『キリスト教社会問題研究』第三二号、一九八四年)。

一 回想記録にみるハワイ伝道の位置

一八八五年(明治一八年)、ハワイへの「官約移民」が始まって間もない明治二〇年代に、同志社出身者もハワイに渡航し、伝道に参加したことのあらましを、次の二つの記事でうかがい知ることができる。

まず一つは『ハワイ日本人移民史』の次の記事である。

一八九一年には、メソジスト教会カリフォルニア青年会は、ハワイの直接伝道から手を引き、すべてをハワイ伝道会社にゆだねた。

翌一八九二年(明治二十五年)には京都の同志社大学から奥田亀太郎、奥村楨太郎(のちの江口一民)、神田重英、高森貞次郎、

山崎直および江上源三らが招かれ、伝道に加わった。さらに一八九四年（明治二十七年）には奥村多喜衛が渡航してきたが、かれはのちに、マキキ教会（Makiki Church）を建てた。その建物は、天主閣を模倣し、衆人の注目を集めた。奥村は、一八九四年（明治二十七年）にホノム日本人教会を建てた曾我部四郎とともに、第二次大戦前のハワイの日本人キリスト教会の長老であった。ヒロおよびホノム教会のほかに、一八九二年（明治二十五年）に設立されたヌアヌ日本人教会などが、ハワイにおける古い日本人教会である。

ここには八名の人物があげられている。ハワイ渡航の年度など正確でないものがあり、おそらく、この記事は『布哇日本人発展史』⁽²⁾を参考に書かれたものと思われる。それはともかく、奥は奥亀太郎が正しく、奥村（のち江口一民）は奥村楨次郎、高森は高森貞太郎でなければならぬ。

第二は『ハワイ島日本人移民史』であり、次のような記事がみられる。

一八九二年（明治二十五年）に、岡部次郎は、日本へ帰り、京都の同志社から四人の少壮宗教家をヒロに連れてきたのである。

▼ヒロ教会一代目牧師の奥梅太郎^{（マウイ）}

▼ヒロ殖民新聞（奥村楨太郎改め）江口一民

▼マウイで神田塾を開いた 神田重英

▼マウイで失意の牧師 江上源三

この四人で面白いのは、奥梅太郎^{（マウイ）}だけが伝道士として、使命を果たしたが、神田重英氏はマウイで神田塾を開いたり、保険業をやったり、新聞に手を出したりして、成功よりも失意の人であった。

江口一民氏に至ってはパイプルを捨てて、大酒呑みになった組であり、コハラの製糖会社を買収しようとして失敗、ヒロ殖民新聞を起して失敗した。しかし、日英両語が確かなので、通訳を業として、ヒロ水産会社が株式組織として発足する時は、北川磯次郎氏や、松野亀蔵氏等の顧問として、ヒーン弁護士等と周旋の労を取ってくれた……と、松野亀蔵氏は非常に江口氏を徳と

していた。

江口氏が、死に臨んだ時、引導を渡したのが、ホノム教会の曾我部牧師であり、旧知の間柄であった。その江口氏は、プナハワイ墓地に葬られており、曾我部牧師は、その隣りのホメラニ墓地に眠っている。江上源三牧師は、ヒロからマウイに渡った。当時のコナ反響を調べて行くと、失意の伝導士らしくあり……教役者としてよりも、事業に手を出して、この人も失敗したらしい。

岡部牧師がヒロに蒔いた「四粒（ツブ）のムギ」すなわち奥牧師、江口、神田、江上の発育は、岡部牧師が期待した如く良好ではなかったらしい。

しかし、一八九五年にホノルルに出て、副牧師として招聘した奥村多喜衛牧師は、岡部牧師の期待以上に、大をなした宗教家である。⁽³⁾

この記事は、四人のその後の様子がやや誇張されて書かれており興味深い。

ところで、同志社出身者とハワイを結ぶきっかけを作ったのは、この記事にあるように、岡部次郎である。彼は、ハワイにおける日本人最初の組合派の伝道師で、一八九一年（明治二十四年）一月ハワイ島ヒロ教会を設立し牧師に就任している。その翌年、彼は伝道師をもとめて日本に一時帰国した。この岡部次郎の行動の経緯については、一八九四年（明治二十七年）ハワイに渡航し、多年伝道に従事した奥村多喜衛の『布哇伝道三十年略史』（以下『三十年略史』と略す）の一八九二年の項に次のように述べられている。

我同胞の数は頻りに増加して己に二萬五千に達し伝道は日に益々其切要を感ずるに至りたるを以て。伝道会社は岡部氏を日本に派し。布哇伝道の急を説き伝道者を募集せしむ。その運動功を奏して多くの希望者を起したり⁽⁴⁾

さて帰国した岡部は、大阪における組合教会総会に出席し、四月一日浪華教会における組合教会の懇談会でハワイへの伝道師渡航をすすめ、また、同志社にもやってきて、演説を行なった。

なお、前記の奥村多喜衛は、この岡部の演説を聴き、ハワイに渡る決心をした。

彼は『恩寵七十年』で次のように回想している。

余が同志社神学校在学中即ち一八九二年（明治二十五年）岡部次郎氏布哇より来て演説し盛んに布哇行を勧誘した。余は其前サージェント著ヘンリー・マルチンの伝記を読み彼がケンブリヂ大学を卒へ同校教授の榮譽ある地位を与へられたが、伝道心に燃えて居たので辞して宣教師として印度に赴いた。滞留六年不良な氣候と不休の努力に著しく健康を害し、一時休養のため帰国の途次ベルシャ湾にて逝去した時に年僅かに三十一歳、余はマルチンの信仰と意気に感じ、自分も卒業後は何処なりと海外に出て伝道してみたいと思ふて居る時であつたので。岡部氏の演説に少からず心を動かしした。

余は卒業の歳即ち一八九四年の春愈布哇行に心を決め、デビス博士が六月渡米の途次ホノルルに立寄り。布哇伝道会社に交渉してくれるを待ち。家族の都合や色々の面倒すべてを打切つて。其年の七月十四日汽船ベルデック号にて横浜を出発した。

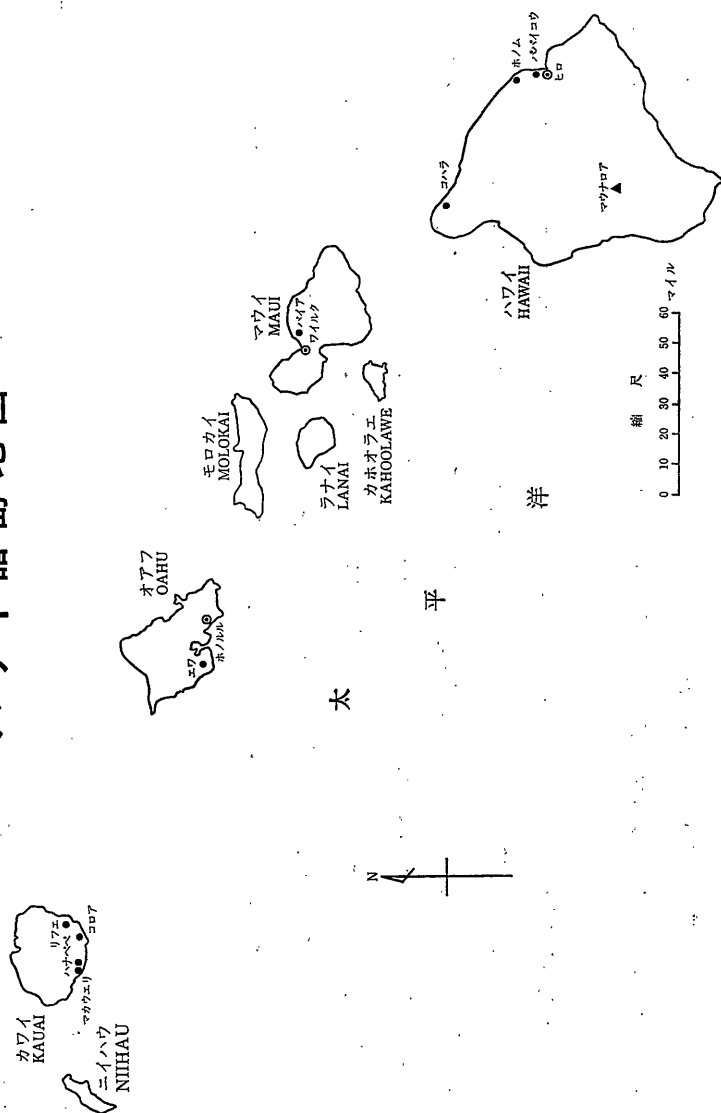
さて、ここで、彼等がそれぞれ、いつハワイに到着し、どの教会でいつからいつまで牧師として在職し、いつ退職したかについて、前出の『三十年略史』の年代別および教会別記事を中心として、年表風に整理したのが次ページの表である。

この表で、佐々倉代七郎が前掲の『ハワイ日本人移民史』の記事で同志社出身者の牧師として名前があげられていないにもかかわらず含めたのは、他の八名とともに同志社在籍の記録で確認され、『三十年略史』に、初期の伝道者として名前があがっているためである。なお、彼等のハワイ渡航後のくわしい活動は、第四章で取り扱うこととする。要するに、一八八五年（明治一八年）よりはじまったハワイ官約移民によって日本人が増加し、新しい移住地に伝道師を必要としたため、ハワイ伝道会社は岡部次郎を日本に派遣し、彼がハワイ伝道の必要を説き、彼等がその求めに応じたものであることが、以上の回想記録から知ることができるのである。

初期ハワイ日本人伝道者一覧

西暦年	奥 亀太郎	高森貞太郎	江上 源三	神田 重英	江口 一民	菅我部四郎	奥村多喜衛	佐々倉代七郎	山崎 直
1892年	6月来布 ハワイ島 ホノム伝道 12月オアフ島 ホノルル教 会、エワ耕 地出張説教	12月来布	12月来布						
1893年	12月ハワイ 島ヒロ教会	1月カワイ 島リフエ教 会、コロア 伝道	1月マワイ 島バイア教 会	11月来布 ハワイ島コ ハラ教会	10月来布 暫時ホノル ル、エワ耕 地出張説教				
1894年	同辞職	11月同辞職 帰国	↓		4月カワイ 島マカベリ 新伝道地、 ハナベベ教 会出張伝道	3月来布 ハワイ島ホ ノム教会	8月来布 ホノルル教 会副牧師	5月来布 ハワイ島バ バイコウ教 会	6月来布 暫時ホノル ル、エワ出張説教 11月カワイ島 リフエ教会
1895年			4月マワイ島 ワイルク教会		↓		5月ホノル ル教会牧師		↓
1896年			↓		11月、同辞 職帰国		↓		11月マカベリ 伝道地兼任 出張、ハナベ ベ出張説教
1897年							5月布哇禁 酒会再興 第一次会長 ワイルク教 会暫時滞留		2月マカベ リに移る 同辞職帰国
1898年			↓						
1899年			同退職						
1900年								7月同辞職 帰国	
1901年				8月同退職					
1902年							ホノルル教 会辞職ホノ ルル東部に 伝道開始		
⋮							↓		
1904年							4月マキキ 教会設立		
⋮							↓		
1909年							5月按手札 式を挙ぐ		
⋮									
1915年						按手札をう く			
⋮						↓			

ハワイ諸島地図



(1) ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』(布哇日系人連合協会、一九六四年)二二五ページ。

(2) 森田栄『布哇日本人発展史』(真栄館、一九一五年)三一〇ページ。

(3) ヒロタイムス編『ハワイ島日本人移民史』(ヒロタイム

ス、一九七一年)一六三—一六四ページ。

(4) 奥村多喜衛『布哇伝道三十年略史』(一九一七年)七ページ。

(5) 奥村多喜衛『恩寵七十年』(一九三五年)二二ページ。

二 同志社在籍の記録

ここでは、彼等がいつ頃、同志社に在籍していたかを明らかにしておこう。『同志社百年史 資料編一』に収められている生徒の在籍記録は四種類あり、これを古い順に一覧表にすると、次ページのようなものである。

「同志社英学校概則」に見られる城貞太郎のちの高森貞太郎のことであり、彼と奥村禎次郎が熊本より同志社に入り、この時点で、奥亀太郎がすでに卒業していることがわかる。また「生徒族籍氏名一覧」では、彼等のうち奥村多喜衛を除く七名の在籍が明らかとなる。とくにこの年の在籍記録は出身県のみでなく、くわしい郡町村まで記載されているので、現地調査をすすめる場合の手がかりになるものである。「同志社学校一覧」は、この翌年のものであるため、この七名が佐々倉を除き一学年ずつ進級していることがわかるのみであるが、奥亀太郎の卒業年月を示す記録がみられる。

同志社在籍の記録以外、念のため、『同志社校友会名簿』によって、卒業者をみてみると、彼等のうち五名しか収載されていない。なお、奥村多喜衛の同志社神学校入学は、後述のように「同志社学校一覧」(明治三三年五月)以後に当る。

同志社出身の初期ハワイ伝道者の足跡

(備考)	奥村多喜衛	佐々倉代七郎	江上源三	神田重英	山崎直	曾我部四郎	奥村禎次郎	城貞太郎	奥亀太郎	
									神学生 京都府山城国	同志社英学校生徒 (明治一七年四月)
出身県名は省略。							普通科生一年生	普通科生三年生		同志社英学校概則 (明治一八年九月)
奥村禎次郎は奥村禎太郎となつてゐる。江上源三は江上権三となつてゐる。神田重英は「カ之部」に出ている。		群馬県東群馬郡前橋田中村土族	普通科三年生	普通科二年生	普通科三年生	普通科三年生	福岡県筑前国早良郡梅林村土族	熊本県肥後国阿蘇郡小池野村平民	普通科四年生	生徒族籍氏名一覽 (明治二二年一月)
出身府県名は省略。江上源三は江上源造となつてゐる。		同右	同志社普通学校普通科三年生	同右	同志社普通学校普通科四年生	同志社普通学校別科神学三年生	同右	同右	明治一四年六月普通科卒業 明治一七年六月 本科神学卒業	同志社学校一覽 (明治二三年五月)
『昭和四〇年度同志社校友会名簿』(一九六五年)内「三ペー」は全体の人数を示す。	明治二七年神学校別科 (七)	明治二六年普通学校 (四六)					同右	明治二三年普通学校 (二七)	明治一四年英学校正科 (一八) 明治一七年 英学校余科(一三)	同志社校友會名簿

三、出身地および渡航まで

出身地については、奥村多喜衛以外、先の同志社在籍の記録で明らかである。ここでは彼等の同志社卒業後、ハワイに渡航するまでの活動を各人ごと追跡することを主とするが、彼等の家族や同志社入学に至るまでの時期についても、できうる限り追ってみよう。なお、山崎直については、出身地の現地調査も試みたが、手がかりが全く得られなかった。

① 奥 亀太郎

彼は京都の出身で、彼の父輝太郎は四条教会（現京都教会）の創立会員であり、執事をつとめていた。⁽¹⁾ 両親とも同じ日に四条教会で受洗していることが『京都教会百年史』で知ることができる。

奥輝太郎 天保一二年五月五日生〔石油商〕 下京区第十四組長寺富永町二七番戸 明治十八年一月一四日受洗入会
奥ま津 嘉永五年一月三〇日生 奥輝太郎妻 明治十八年一月一四日受洗入会⁽²⁾

ここに記されている住所の位置は、現在京都市の繁華街の中心、四条河原町高島屋を下ったあたりと思われる。彼自身は、はじめ東竹屋町の第三公会に属し、その第三教会より明治一二年、第二教会に移籍し、さらに同志社英学校普通科を卒業後、明治一五年には今出川の第一教会に移っている。⁽³⁾

彼は他の初期ハワイ伝道者に比べて、同志社卒業が早かったため、ハワイに至るまで、かなりの活躍が見られる。まず彼が同志社普通科を卒業した一八八一年（明治一四年）、亀岡に派遣され、当地の伝道のような報告している『七一雑報』の記事を紹介してみよう。

丹波亀岡の伝道は堀氏に始まり今は早やバプテスマを受けて救ひの道に入りし人も四五名あり僕は毎安息日に説教を催ふせし

が聴衆は平均二十名位もあり水曜日には三四の女と聖書を会読せり⁽⁴⁾

また、翌一八八二年には群馬県安中へ伝道に赴いた記事がみられる。⁽⁵⁾ さらに同志社で一八八四年(明治一七年)三月に起きたリバイバル運動にさいしては、「休暇に入るのを待ちかねるように」近江に、堀金太郎(貞一)、馬場種太郎と伝道に出かけており、彼が本科神学生の時代、すでに他の仲間とともに各地を熱心に伝道していた様子をうかがうことができる。なお、一八八四年(明治一七年)六月、彼は村上直次郎、原田助、堀貞一、井手(竹原、義久、亀山昇、松尾敬吾、中島(長谷川)末治、大西祝、杉田潮、綱島佳吉、上原方立、小崎(安達)成章らと英学校余科すなわち神学科を卒業した。⁽⁷⁾ 彼の同級生には有力な人達が多く、とくに原田助、堀貞一、綱島佳吉が、彼と同様、後にハワイ伝道に関与するのは興味深い。

同志社卒業後、ハワイに渡るまでの彼の活躍ぶりはどうであったのか。『今治基督教会沿革小史』によると、彼はすでに一八八三年(明治一六年)の学生時代、夏季中に、愛媛県松山に派遣され、八月七日大街道劇場、九日と二八日は府中町の寄席での大説教会で演説を行なっているが、⁽⁸⁾ 八四年もこの地方で伝道に力を注いでいる記録がみられる。⁽⁹⁾ 翌八五年二月二日には、小松教会が設立され、彼は仮牧師に就任している。⁽¹⁰⁾ 八六年一月一九日には、伊勢時雄の媒介、二宮邦次郎の司式で今治教会で結婚式を挙げている。⁽¹¹⁾ しかして同教会の伊勢牧師が同年三月八日辞任し、そのため彼がその後しばらく仮牧師に就任した。⁽¹²⁾

次に彼は熊本に移っている。『日本組合熊本基督教会沿革』によると、同じ八六年末に熊本教会(現熊本草葉町教会)の第五代の伝道師として赴任した。⁽¹³⁾ 翌八七年六月には熊本英語学会が創立せられ、授業が始められたが、彼がその主任教師となった。その頃、熊本に赴任した米国の宣教師O・H・ギューリック夫妻がこれを助けた。学会の名は

世に知られ、半年前に学び舎を失った大江義塾の生徒をはじめ来り学ぶ者は日を追って増加し、幾月もたたぬうちに百名を数えるに至ったという。また、それと相前後して、熊本女学会の前身である無名の一学会が開かれ、奥もその訓育に尽した一人であった。同じ八七年九月には海老名弾正夫妻が熊本に赴任、翌年にはS・L・ギューリック、ジュリア・ギューリックなども加わり、講義所、学会はますます発展していった。⁽¹⁴⁾ 八八年四月二〇日、英語学会は熊本英学校と名を改め、正式の学校として発足した。『熊本県教育史』によれば、英語を主体として普通教科を副としている学校で、この時代としてはかなり程度の高い英語の学校であつたらしい。創立当時の職員として、海老名弾正、山田健三郎、奥亀太郎、徳富健次郎、浜田康喜、河田重雄の六人の名が挙げられている。⁽¹⁵⁾

さて、奥はいつ熊本を去ったのか詳しいことは不明であるが、翌八九年に彼は福岡教会（現福岡警固^{けこ}教会）に牧師として就任している。「明治十九年不破牧師辞任以来定まれる牧師なく、僅に神学生等の応援によつて余喘を保つて居た我が教会も、明治二十二年の秋に至り伝道会社より派遣せられた奥亀太郎の牧師として来任するに及んで、其の尽力の結果信徒の信仰再び稍々活気を呈するに至った。⁽¹⁶⁾」（『福岡組合基督教会略史』）。その後の彼に関する記事を当時の「福岡組合基督教会日誌」より拾ってみる。九〇年一月二三日同志社々長新島襄永眠、二月二日新島の葬儀のため奥氏帰京。九一年二月九日奥亀太郎氏、当教会を引揚げ京都に大帰す。五月一七日奥亀太郎氏家族近日大阪へ転住可相成に付き午后二時より送別会を開けり。五月二一日奥亀太郎氏家族午後一時頃乗船大阪へ向け出発せられたり。

彼は福岡にも一年半ほど在任したのみである。その後、彼は大阪の島之内教会に九二年三月まで牧師として就任している。⁽¹⁷⁾ そして、一八九二年六月、彼は岡部次郎の奨めにしたが、島之内教会牧師をやめて、ハワイに岡部とともに渡る。⁽¹⁸⁾ ホノルルにおける生活はこうしてはじまつた。⁽¹⁹⁾

② 高森貞太郎

彼については、『同志社校友会名簿』で、一八九〇年の普通学科卒業者の中に、江口一民（奥村楨次郎）とともに高森（城）貞太郎なる人物がおり、在学中、城貞太郎といったことが知られる。⁽²⁰⁾ 彼の出身地である小池野村は、現在、阿蘇郡の波野村に属し、阿蘇山の東、大分県との県境に位置する。守旧思想の強い阿蘇地方出身の彼がなぜ同志社まで来ようになったのかは明らかでないが、大江義塾、あるいはその分校であった阿蘇郡内牧村（現阿蘇町）に毛利次宗が開いた私塾⁽²¹⁾の影響があるのかも知れない。

③ 江上源三

彼は熊本県八代郡鏡町出身というのが明らか⁽²²⁾で、生年月日やその他のことは不詳である。ただ、後述するように『基督教世界』に、彼が、熊本洋学校で学び、同志社の第一回卒業生である岡田松生の弟とあり、興味深い。⁽²³⁾ 岡田松生のみならず、彼の出身地、熊本県八代郡のとくに鏡町や八代町などから多数の若者が彼と同時期に同志社に学んだことが、前出の「生徒族籍氏名一覧」⁽²⁴⁾（明治二年一月調査）で明らかである。参考のために明治二年一月調査時の氏名、学科をあげると次の通りである。すなわち、彼と同じ鏡町からは野口未彦（別科神学一年生）、養田林蔵（普通科三年生）、また上鏡村からは伊藤肇（普通科三年生）、伊藤尚（同）、八代町では池田定信（別科神学特別一年生）、植田方直（別科神学二年生）、遠藤能定（神学科一年生）、遠藤静能（普通科一年生）、亀山左乙（同）、林田喜一郎（同三年生）、多賀平（同五年生）、平子貞誠（同、八代郡のその他では、鷲山誠晴（別科神学二年生）、回里淳（普通科二年生）⁽²⁵⁾）である。⁽²⁵⁾ なぜこの地域から多数の者が同志社に学んだかについては、『鏡町史』によると、山崎闇斎学派の儒者名和董山の影響がうかがえる。彼は一八六六年（慶応二年）に「川端塾」をひらいたが、このときの門下生に岡田松生や外務大臣

になった内田康哉、熊本洋学校出身で第五高等学校における夏目漱石の後任、さらに九州学院初代院長となった遠山三良らがあった。一八七二年（明治五年）学制公布の際には「川端塾」は「発蒙義塾」と称して継続し、また一八八〇（明治十三年）には「変則中学新川義塾」、さらに一八八三年「修身専門学校」と改称、童山が一時を除き、いずれも指導に当った。修身専門学校時代の塾長には、朝鮮伝道に従事した渡瀬常吉⁽²⁶⁾がなっている。その他童山の門人名録をみると、先の同志社在籍者の中では、野口末彦、伊藤尚、回里⁽²⁷⁾（郡）淳の名があげられている。さらに、岡田源三（ハワイ）の名もみえる⁽²⁸⁾。江上源三が岡田松生の弟であるとすれば、おそらく彼も名和童山の門下生ということになる。

さらに、一八八二年には岡田松生が「鏡英語学校」を創立（後に「鏡が池英学校」と改称⁽²⁹⁾）。同じ熊本バンド出身の徳富猪一郎が熊本に大江義塾を設立したのと同時期である。鏡英語学校の出身者は不明であるが、同志社に進んだものも幾人かはいたであろう。大江義塾を出た先の八代郡出身の同志社在籍者は、回里⁽³⁰⁾（郡）淳、平子貞誠⁽³⁰⁾。新川義塾、鏡が池英学校、大江義塾はいずれも一八八六年～一八八七年に廃校になってしまった。なお、『日本組合熊本基督教会沿革』によると、渡瀬常吉（第十代）、および遠藤能定（第十一代）⁽³¹⁾がそれぞれ牧師として就任している。また、伊藤尚は、同志社で学んだ後、郷里にもどり農業に従事していたが、一九〇二年ハワイに渡航。カワイ島の商店で働いた後、マウイ島プネの日本語学校の教師、郵便取扱人となった⁽³²⁾。彼の一族も多数ハワイ・アメリカ本土に移住している。彼がなぜ渡航先にハワイを選び、マウイ島で働くようになったのか。同じマウイ島の伝道師であった江上との関係が考えられるが、確かな証拠はない。いずれにしても、明治期この地域のキリスト教信仰について、さらに同志社や海外渡航とのかかわりについてもう少し追求する必要があり、これらについては、今後の課題と

したい。

④ 神田重英

彼は京都府下船井郡園部村（現園部町）の出身である。筆者は一九八四年三月現地を訪れた。町の教育委員会や、彼にかかわりがあると思われる丹波教会の関係者からいろいろ資料を見せていただいたが、残念ながら彼に関する記述は期待どおりには見出せなかった。しかし、彼の出生や家族については次のことが明らかとなった。

姓はコウダ、⁽³³⁾一八七二年（明治五年）明治五年二月二日生れ、住所は園部村本村（現在宮町）、父は重雄、母は死亡（調査時点）。しかし弟、神田重慶^{いづみ}名義で、一八九一年七月六日、札幌市北七条東二丁目に全戸移住している。彼の家族がなぜ北海道に渡ったのか。詳しいことは明らかでない。しかし丹波教会の伝道から北海道に移った留岡幸助との関係が考えられる。事実、父重雄については、『家庭学校』の会計報告で、明治三三年三月の寄付者の中に彼の名が記載されており、金拾円也の寄付を行なっている。⁽³⁴⁾また、留岡の「十九日の北海道」と題する文中（『人道』六号 明治四三年一〇月五日）に次の記述がみられる。

即ち前田英吉、神田重雄の両君の如きは友人中の友人にて、十年前余が札幌に至るや、直ちに余を旅館に訪ひ、余亦其寓を見舞ふて互に今昔を語り、東方の白くるを知らざりしに。今や幽明処を異にし、幾多訪客の中に於て両氏を算せざりしは、余に於て何ぞ些少の恨事ならんや。彼等既に亡矣。故に俟てども終に來らざるなり。如かず自ら行きて彼等を訪づれんにはと。着札幌直ちに馳せて彼等を其墳墓に訪ふ。墓は札幌を去る約一里琴平共同墓地にあり。⁽³⁵⁾（傍点筆者。以下同じ）

弟重慶についても、「家庭学校概要」の職員の中に「日用品係 同（農場）神田重慶（夫妻）⁽³⁶⁾」とあり、また「社名淵だより」と題する留岡の文（『人道』二五一号 大正一五年九月一五日）に重慶夫妻の名が出てくる。

私は去る六月二十四日上野を出立、途中函館と札幌とに立寄り、七月二日午後二時前、懐しき社名淵の谷へと着いた。遠軽駅に迎へて呉れたのは鈴木、神田、吉田の三氏と大谷、吉田の両夫人であつた。「中略」相変らず私の住居は谷の入口を五丁登った、右の丘上にある樹下庵だ。樹下庵に御輿をおろすと、早や先に神田夫人は風呂を沸かし、食膳を整へ、何一つ不自由のないやうに準備を整へられて居る。「中略」神田重慶君、養鶏に妙を得たと聞き⁽³⁷⁾

彼の家族のことで少し引用が長くなつてしまつたが、父重雄は留岡の親しい友人であり、留岡と相前後して園部より札幌に移住、しかし明治四三年の時点で既に死亡していることがわかる。弟重慶夫妻もまた留岡が校長をしていた遠軽の家庭学校の職員をしていたのである。

さて、重英の同志社に入学してから卒業後ハワイに至るまでのことが『布哇成功者実伝』に記載されているので、次に紹介する。

君は明治五年二月を以て京都府下船井郡園部町に生る君の家は世々小出信濃守の藩士たり幼にして園部小学校を卒業し明治十九年即ち君の齡十五歳の時京都同志社に入り刻苦勉勵の末普通科を卒へ進んで神学部⁽³⁸⁾に転じ二ケ年間基督教の骨髓を窺へり学成るに及んで東京及仙台に伝道を試むること四ケ月の後熊本市に赴き東亜学館に於て英学の教鞭を執る事となれり此時正に明治二五年の未なりし其間福岡鹿児島方面を布教の爲め巡回せりと云ふ当時九州全縣に於ける基督教の監督者は米人シドニー、ギョリック氏なりしが氏の君を信する甚だ厚く爲に君を拔擢して在布の同胞に基督の福音を伝へん事を以てせり於是乎君其知遇に感じ明治二十六年十一月横浜よりチャイナ号に便乗し無事ホノルルに到着

彼が明治一九年同志社に入学したというのは、さきの「生徒族籍氏名一覧」の記述にもうかがえるが、普通科を卒業し、神学部⁽³⁹⁾に転じたというは従来知られていない。彼が教鞭を執つた東亜学館は、奥村楨次郎のところ⁽⁴⁰⁾で詳しく述べるが、熊本英学校が奥村事件によつて分裂し、奥村解雇反対派の人達が新たにつくつた学校である。明治二五年の

末であれば、奥村も恐らく同僚としていたのであろう。あるいは奥村の後任として来たのかも知れない。また第二次世界大戦後、ハワイのマキキ教会の牧師にもなる元同志社総長牧野虎次も、柏木義田の紹介で明治二五年九月より二六年七月まで教師として赴任している⁽³⁹⁾。ちょうど彼と同時期なのである。さらに牧野は、その後北海道集治監教誨師(明治二八年)、東京家庭学校長(昭和八年～一三年)⁽⁴⁰⁾となるが、神田との奇しき因縁が感じられる。

⑤ 奥村禎次郎(江口一民)

彼は同志社の記録によると、熊本県熊本市南千反畑(現在、熊本市内の藤崎八幡宮の鳥居の西南のあたり)が出身地となっている。彼の履歴書では熊本県若北郡水俣村字陣内九八六番地、明治三年二月二四日の生れになっている⁽⁴¹⁾。もともと江口姓の彼が親戚にあたる陸軍々医監奥村氏の養子となったため、姓と出身地の住所が変わったものと思われる。同志社に入学する前、彼は熊本で徳富蘇峰が主宰する大江義塾に約三年間在籍した。花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』によれば、明治一五年三月入校。一八年三月一九日、創立第四紀念行事の金峰山登山競争において第二着となる。一八年四月まで「集金簿」にその名がみえる⁽⁴²⁾、とある。同志社には一八八五年(明治一八年)九月に入学し、九〇年六月卒業しており、先の同志社在籍の記録を同じである。同志社卒業後、すぐに帰郷、大江義塾の後身ともいえるべき熊本英学校の教師となった。徳富蘆花の後任として迎えられたともいわれる⁽⁴³⁾。熊本英学校は、前述のように奥亀太郎が創立した熊本英語学会が一八八八年、改称・移転してできた学校で、奥のあと、海老名弾正によって培われた。しかし海老名も一八九〇年限りで熊本を去り、九一年、柏木義田が京都から来て、海老名の正式後継者選定までの一カ年間は、臨時後任に当った。そして英国エジンバラ大学留学中の蔵原惟郭⁽⁴⁴⁾と交渉を重ね、正式後継者として迎えることになった。一八九二年一月一日、蔵原新校長の歓迎会が英学校で行なわれた。そこで、いわゆる「奥村事件」あるい

は「熊本英学校事件」がおこる。これについては、とくに上河一之「熊本における教育と宗教との衝突―奥村事件を中心として」(『近代熊本』第一七号 一九七六年)が詳しい。ここでは、事件の経過のみ、簡単に追ってみる。歓迎会の席上、奥村禎次郎が教員代表として祝辞を述べた。それは次のようなものだったといわれている。「本校々育の方針は日本主義に非ず亜細亜主義に非ず又た欧米主義にもあらず乃ち世界の人物を作る博愛世界主義なり故に我々の眼中には国家なく外人なし況んや校長をや況んや今日の来賓をや予輩は只だ人類の一部として之を見るのみ云々」。これをまず国権党の機関紙であった九州日日新聞がとりあげて「眼中国家なしとは非国民的な発言だ」と攻撃し、ついに当時の松平正直県知事から「其校教員奥村禎次郎は解雇すべし」という命令が校主浜田康喜あてに来了。この爆弾的命令で、英学校は大騒ぎになり、知事の命令に従うか、従わないかで、先生も生徒も真つ二つに割れ、教会も二つに分れてしまった。しかし結局、奥村禎次郎は解雇され、同時に英学校は分裂。知事命令は断固拒否すべきだと主張する人達は、その年四月新たに東亜学館という学校をつくった。⁽⁴⁶⁾奥村もおそらく東亜学館に移ったものと思われる。⁽⁴⁷⁾ちなみにこの学校は、資金難のため分立わずか二年、九四年三月再び英学校と合併し、「九州私学校」と名を改めたが、九六年七月には廃止されてしまった。⁽⁴⁸⁾

奥村は、いつまで熊本にいたかは不明であるが、その後東京に出て、一八九三年(明治二六年)九月まで『自由新聞』および『めざまし新聞』の記者をしていたという。⁽⁴⁹⁾そして一八九三年一〇月布哇传道会社の招聘に応じてハワイに渡航した。⁽⁵⁰⁾

⑥ 曾我部 四郎

彼は永年ハワイ島のホノムにあり、「ホノムの聖人」と呼ばれ、日系人の間では有名で、ハワイで出版された書物

のいくつかは、彼に関する記事がある。また、最近、彼の伝記もハワイで出版された。JIRO NAKANO "SAMURA I MISSIONARY—THE REVEREND SHIRO SOKABE" HONOLULU, 1984. p. 62. じゅんぱく じゅんぱくの本や別に筆者が収集した資料をもとに記述する。

彼は一八六五年（慶応元年）六月二六日生れ⁽⁵¹⁾。出生地については、前掲同志社の「生徒族籍氏名一覧」の福岡県早良郡梅林村（現在福岡市早良区梅林・福岡市の南西部）と相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』⁽⁵²⁾などによる福岡県筑紫郡堅槽村（現在福岡市博多区堅粕・国鉄博多駅北側地区）の二つの住所が挙げられている。彼は徳富蘆花の友人で、蘆花の著書にも、学生時代の彼のこと書かれている。また、彼の著書『もう三千弗』（一九二六年）に蘆花が序文を寄せており、それに曾我部の同志社入学前のごくわしく書かれている。少し長くなるが、それを引用しよう。

明治十八年の三月、私が従兄伊勢（今横井）時雄さんの世話になるべく、熊本から時雄さんの伝道地伊予今治に往った時、伊勢家には曾我部四郎と云ふ青年がすでに世話になつて居た。私が十八、曾我部君は私より二つか三つ年上で頰骨の隆い、下脛が熟した李の色をして、いつも伏目勝の青年であつたが、教会では屈指の讚美歌上手、而して雄弁家の名が教会青年の間に響いて居た。佐賀（福岡の誤り——筆者注）の人で、今治に落ちつくまでには広島や瀬戸内海の島々を代用教員などして大分流れあるき、それで居て身を持崩さず、純真な青年であつた。伊勢さん宅から日々信者の経営する活版所の職工に通ひ、眼を悪くして黒眼鏡をかけて居る事もあつた。活版所通ひの間々には、正教員の資格をとる為に受験準備をして居た。私共は直ぐ懇意になつた。一緒に田舎伝道にあるいたり、また明治十八年の一夏を廃校になつた中学校の二階に、大テーブルをベットにして、他のMといふ青年と三人蚊帳を釣つて寝たものである。喰ひざかりの青年は、三食の外如何にしてあくことなき食欲を満たさんかと、そればかり苦心した。私共はよく信用を抵当にして曾君の所謂「馬糞」の駄菓子を食べたり、水瓜を借りて食ふたり、一斤五錢の牛肉を三人で四百五十目、飯を一升、桃を二十も一度に平らげた記憶もある。満腹の青年は枕を並べて一夜牛の如く寝たが翌朝未明に曾君は一人何処へか出て往つた。而してまる一日影を隠した。大心配して居ると、夕方になつてぶらりと現はれた。終

日近見山上で断食祈祷して居たのであった。曾君の曰く「本当に神は愛だ」。私共は滅多に喧嘩をしなかつた。唯一度曾君は何か癪に障つて、突然蚊帳の中に起き上り、「来て見い！」と私の脇腹を肘で小突いた。私はびつくりした。「乱暴をし玉ふな！」と云ふたきり、私は黙りこんだ。夜が明けると、曾君はきまり悪い顔をしながら、「昨夜は悪かつた」と詫言。其一言で私の未だ痛んで居た脇腹も心の痛も共に忘れた。曾君は其様な人であつた。

私の今治生活は追々荒んで来た。教会がつまらなくなり、寛大な伊勢さんよりさんざ私をいぢめた兄がなつかしくなり、曾君に對し兄と兄の大江義塾を無暗にほめ立てたものである。私共は唯「非凡」にあこがれて居た。私は曾君を煽つた。此様な処に愚図々々したつてつまらぬ。熊本に往つて、大江義塾に入つたら如何だ。勧められて曾君も其氣になつた。丁度明治十八年も暮近く、伊勢さんが京都行の留守であつた。私は自分の木綿着物一切を持出し、初めて質といふものに入れ、大枚金老円をつくつた。而してある朝、今治の西のはづれまで送つて、曾君と手を分つた。老円の旅費と私の紹介状を懷に、曾君は今治から松山、松山から海伝ひにずうと佐田岬の突端まで歩いて、和船にのせてもらつて豊後に渡り、阿蘇越えでそれでも到頭熊本に着いた。見も知らぬ旅やつれた青年が、見覚ある私の晴着糸入縞の羽織でぶらり玄關に立つた時、私の母などはびつくりしたさうである。

私の仕打は勿論伊勢さんを踏みつけたもので、叔母などは身も細る程心配した。私は此失策をきつかけに、また信仰の道に復へつた。一方曾君は真率な氣象を大江義塾の猛者共に愛され、其雄弁は此処でも光を放ち、曾君は其所を得て比較的愉快な一年を熊本に送つた。愉快な、と私は云ふ、それは曾君の手紙は何時も快活な調子に満ちて居たから。

明治十九年の夏、伊勢家は今治から京都に移り、私も秋から二度目の同志社学生であつた。其年の暮、兄は大江義塾を閉ぢ、家を挙げて東京に引出た。熊本に取残された曾君は、また伊勢さんの世話で京都に来、同志社の邦語神学科に入つた。今治で別れて、一年ぶりに京都で私共はまた顔を合はす事になつた。学部は違ふし各自手前にかまけて最早今治時代の親密を繰返へさなかつたが、然し、明治二十年の末私が京都をしくじつて西へ飛び出す時、曾君に置手紙して借金の後始末なども頼むものである。私が熊本に居る間も曾君は時に元氣づけの手紙をくれた。私が上京して「ブライト」「コブデン」を公にすると、曾君は喜んでまた手紙をくれたものである。

それからはなればなれになり、其後一度東京で会つたきり、私共はもう三十四五年も相見ない。⁽⁵³⁾〔以下略〕

今治時代、「三奇人」といわれる青年がいた。それは徳富健次郎と曾我部当人ともう一人熊本県玉名の青年で、後に

支那に渡り支那人を装っていたが、発見されて殺されたといわれる林愚鉄という三人で、「伊勢の三奇人」といわれて町の評判になっていたらしい。⁽⁵⁴⁾ それはともかく、蘆花が曾我部を兄蘇峰の大江義塾へと脱走させたとき（明治一八年二月二七日）の徳富猪一郎宛、林愚鉄、徳富健の連名の紹介状が残っている。「此人ハ福岡県土族曾我部四郎ナル者ニシテ明治十六年三月当地ニ来リ信者トナリ伊勢兄之世話ニ由リテ活版事業ヲ以テ日ヲ送り」⁽⁵⁵⁾云々と彼のことを説明して頼んでいる。これは活字になった蘆花書信では初期のものである。

熊本の大江義塾時代の彼はどうか。彼は年長ということで、明治一九年三月二〇日の第五回創立記念式で、生徒代表として穴戸萬、渡瀬龜五郎（常吉）とともに演説を行なった。彼は、同年中の閉塾まで在塾して、京都同志社邦語神学校に入学した。⁽⁵⁶⁾ したがって、彼は奥村楨次郎のあと、一年足らず大江義塾で過したことになる。

さて、彼は一八八七年（明治二〇年）九月に同志社別科神学科へ入学したものと思われる。別科神学科というのは、本科神学科とちがいで、一定の入学資格をもたない学生のためにひらかれたコースである。彼は同志社時代四条教会で研鑽に励んだ。八八年一〇月一二日、今治教会より四条教会に転入している。また四条教会の明治二四年『月報』には、次のような離別会の記録がある。

○離別会準備

両講義所「伏見ならびに広野」尚幼稚ナル時ヨリ久シク働カレタル同志社学生曾我部四郎、花田岩五郎ノ二氏ハ本年六月ヲ以テ卒業セラレ夫々任地ニ赴カルニ付、二氏ノ為メ、不日伏見桃山ナル金城閣ニテ離別会ヲ開ク準備中⁽⁵⁷⁾

なお岡部次郎の兄太郎は、同志社で曾我部の一級下であり、やはり九四年より九九年まで伏見町で布教に従事しているが、興味深いことである。さて、曾我部の同志社卒業は『基督教新聞』（明治二四年七月一〇日）の記事による、

と同時に神学校を卒業するメンバーも知られる。⁽⁵⁸⁾卒業後、奈良県の大和郡山に赴任する。『基督教新聞』の「大和郡山教況」の項に「今度同志社神学部を卒業せられし曾我部四郎氏を聘し伝道の任を托するに至りと」とあり、⁽⁵⁹⁾また同年一月六日付の記事では「当地は伝道師曾我面四郎氏来住せられ熱心に忍耐に質朴に働かるゝを以て信者の悦びは更なり求道者又少しとせず就中従来敵視の如くありし中学校の教員生徒間にも追々求道者のあるに至れり」⁽⁶⁰⁾（以下略）と彼の伝道活動が報告されている。彼は、次に群馬県藤岡（現在緑野^{みどり}）教会に赴くが、彼の藤岡での活動ぶりは、『基督教新聞』（明治二十六年三月一〇日付）の「藤岡教会」の項に出ている。

曾我部四郎氏の来任以来漸次に教勢の振起を來たし予ねて数度の演説会を藤岡に開き又中島、栗須、本郷の三ヶ村に毎週一夜宛の伝道を試み居たりしが幸ひに其効果見はれて今回七名の求道者を起したりしかば去月二三日北甘楽教会牧師辻密太郎氏を聘して受洗式を執行するに至れり、受洗者は男三名、女四名外に転会者一名都合八名の入会者ありたり右終りて又晩餐を行ひしに其式に与かる者三十名ありたり⁽⁶¹⁾

しかし彼は、同年六月藤岡教会を辞任している。同じ九月二十九日の記事に、「仁愛なる神は吾教会を強固にせんとて今迄種々の試練を下し給ひたり先きには曾我部氏を得て信徒一同大に力を得しも氏は去月六月末事故の為に辭職せられ其後西京同志社より篠田昌武氏の夏期伝道に來藤せられ」とある。⁽⁶²⁾『緑野教会記録』によると、彼は四代目（あるいは五代目）の伝道師で、彼の時代は藤岡町の信者がふえ盛んだったようである。彼は独身で、妹と二人であった。亜米利加留学のためやめたとある。⁽⁶³⁾ハワイ伝道のことをさしているのだらう。なお、ハワイ渡航まで何をしていたかも不明である。ともかく、彼は一八九四年三月、横浜よりチャイナ号に乗船してハワイに向った。⁽⁶⁴⁾

⑦ 奥村多喜衛

彼は高知県出身、永年ハワイで活躍し、著書も多く、彼に関する資料には事欠かない。ここでは、まず同志社入学までの略歴を、彼の『説教集』⁽⁴⁶⁾の記事よりまとめてみる。

彼は一八六五年（慶応元年）四月一八日安芸郡田野町の奉行役宅で生まれた。曾我部四郎と同年である。父、奥村又十郎、母トシで、父は安芸郡奉行を勤めていた。子供るとき、高知市内の片町に移る。父は漢学者で、かつ詩をよくし、その著書『秋灯胆史』は藩の修史の材料として重んぜられた。藩主山内容堂の学問の相手もした人で、彼も七才の頃から父に大学を教わる。八四年（明治一七年）高知の堀詰座で、宣教師フルベッキの演説を聴いたのが、キリスト教との接触の始まりであった。同年、父は世を去り、翌年、彼は大阪に出て、府警察本部の書記をつとめることになった。八七年（明治二〇年）小川カツ子と結婚、家族も大阪へ呼び寄せた。しかし、友人に促されて、言論・出版・集会の三大自由請願のため上京、片岡健吉の感化によって、一番町教会に出入りした。保安条例発布の後、彼も大阪に帰り、大阪教会に出席し、八八年（明治二年）宮川経輝牧師より洗礼を受けた。九〇年、宮川牧師の勧めに従って、自分の天職をキリスト教伝道に見出し、同年九月、家を片付け同志社神学校に入学した。先の「同志社学校一覧」の記録の調査が行なわれた直後に入学したわけである。

同志社在学中については『説教集』の中に次のように述べている。

神学校在学四年、初めの一年はもっぱら勉学に時をささげたが、次の三年は課業の外実地伝道に従事した。すなわち江州草津町の教会牧師田村秀光氏辞任の後を引うけ牧会の任に当った。金曜に学校の課業終ると直ぐにワラジをはき、日本里数三里の道を歩いて大津に行きそこより船にて琵琶湖を渡り草津まで往く。金曜日から、土曜、日曜の両日訪問に説教に寸暇なく働き、月

曜の朝汽車にて帰京したものである。この実地伝道は私にとっては学校の課程よりもはるかに大なる修業となった。

また私は一週一晚四条教会附属講義所に説教したので、その教会の若い男女十人と神学生三名と私の十四名で鶴鳴会と云うものをこしらえ、しばしば寄合つて信仰を励まし合つた。⁽⁶⁶⁾〔以下略〕

四条教会は、現在の京都教会であるが、『京都教会百年史』によれば、奥村は九三年（明治二六年）の夏、三カ月間四条教会の夏期伝道師をつとめた、とある。彼は、九四年六月、同志社神学校別科を卒業した。『基督教新聞』（明治二十七年七月一三日付）の記事にも、卒業生の中に彼の名が出てゐる。⁽⁶⁸⁾そして、すぐにハワイに向けて出発した。その経緯は、先に紹介したとおりである。八月一四日のベルチック号にて横浜をたち、同月二七日ホノルルに着いてゐる。⁽⁶⁹⁾

⑧ 佐々倉 代七郎

彼の出生地となつてゐる群馬県東群馬郡前橋田中村は、現在前橋市内、国鉄両毛線前橋駅前あたりに位置する。彼のハワイに至るまでのあらましは、藤井秀五郎『新布哇』によれば、「明治十三年群馬県師範学校に業を卒えて四ヶ年間同地方に於て学校教員を勤め更に十八年九月より同志社に学び二十六年六月に業を卒え岡山孤児院に教鞭を執り児童の薫陶に努めしが二十七年五月伝道師として渡布し」⁽⁷⁰⁾とある。彼の同志社時代、奥村多喜衛と同じ信仰上の団体である「鶴鳴会」に属してゐたことを示す記述が、前出の『恩寵七十年』にあるので紹介する。

余が同志社在学の頃京都に信者の小さい一団体があつた。鶴鳴会と称へ少々風変わりな仲間の寄合で。先づ指を折れば南禅寺の珍客と綽号され。年に一度しか髪と髭とを切らぬと云ふ岩村秀太郎君。筒袖に短い袴。片々の尻切れ草履で大道を闊歩する丸山伝太郎君。佐々倉代七郎君。中村伊津吉と其妹。余と神学校に同級の仙田弥三郎君外に二三の男女が数えられた。其の一員に加へられた余も慥に一変人であつたと見える。而も此寄合から信仰上得た所は頗る多大であつた。⁽⁷¹⁾

鶴鳴会については、奥村のところであつたように、当時の四条教会（現京都教会）の男女一四名で作られ、信仰を励

まし合った会である。なお、中村伊津吉、岩村秀太郎も後にハワイに渡航、奥村の仕事を助けた。⁽⁷²⁾ また丸山伝太郎は、一八九三年、志方之善の協力者として北海道インマヌエル村創設のため渡道している。⁽⁷³⁾ この仲間の多くがその後、開拓伝道に従事しているのは興味深いことである。

- (1) 『京都教会百年史』(日本基督教団京都教会、一九八五年) 一一七ページ。
- (2) 同前、七〇ページ。
- (3) 同前、三二ページ。
- (4) 『七一雑報』第六卷四二号(明治一四年一〇月二一日)。
- (5) 同前、第七卷二八号(明治一五年七月一四日)。
- (6) 『同志社百年史 通史編一』(同志社、一九七九年) 一三八ページ。
- (7) 同前、一一一ページ。
- (8) 『今治基督教教会沿革小史』(今治基督教教会、一九二九年) 四七―四九ページ。
- (9) 同前、五二ページ。
- (10) 同前、五三ページ。
- (11) 同前、五五ページ。
- (12) 同前、五六ページ。
- (13) 『日本組合熊本基督教教会沿革』(同FG会、一九二六年) 四ページ。なお、高橋虔「日本組合基督教教会年表(前編)」(『キリスト教社会問題研究』第一六・一七号、一九七〇年)によれば、明治一九年一二月就任とある。
- (14) 前掲『日本組合熊本基督教教会沿革』五―七ページ。山本十郎編『肥後文教と其城府の教育』(熊本市教育委員会、一九五六年)四七九ページ。茂義樹「シドニー・ルイス・ギューリック略伝」(武田英子編著『青い目の人形』山口書店、一九八五年、所収)二二七ページ。
- (15) 『熊本県教育史 中巻』(熊本県教育会、一九三一年)三二四―三二五ページ。なお、前田河広一郎『蘆花伝』(岩波書店、一九三八年)一三一ページによれば、彼は蘆花の友人で、一八八八年八月蘆花と一緒に阿蘇登山を行なっている。
- (16) 『福岡組合基督教教会略史』(一九二九年)五ページ。なお、前掲「日本組合基督教教会年表(前編)」によれば、明治二二年九月就任とある。
- (17) 前掲「日本組合基督教教会年表(前編)」。
- (18) 『基督教新聞』第四六三号(明治二五年六月一〇日)。
- (19) 同前、第四六八号(明治二五年七月一五日)。
- (20) 彼は在学中は城貞太郎で、卒業後高森貞太郎になっている。

る。その頃、養子に行つて姓が變つたものと思われる。

- (21) 花立三郎『大江義塾』（ベリかん社、一九八二年）二七五および二九五―二九八ページ。

- (22) 藤井秀五郎（玄漢）『新布哇』（大平館、一九〇〇年）附録、在布日本人出身録一四ページにも、同住所の出身とある。

- (23) 『基督教世界』第二四一四号（昭和五年五月八日）米國通信（八）。

- (24) 岡田松生については、永松豊蔵編著『鏡町史（下巻）』（一九八四年）一一三―一四ページによると、一八五八年―一九三九年。同志社卒業後の職歴は、一八七九年上京し、学農社で教職に当る。一八八二年郷里に帰り、鏡英語学校を設立。一八八五年県會議員。一八八八年海軍省に就職。一八九七年農商務省製鉄所に就任。一八九八年関西貿易合資会社（京都市所在）に入社、米國ニューヨーク支店支配人として同地に赴任。一九〇三年同社解散のため帰國。一九〇四年岡田商会開店。一九二三年業界引退。
- (25) いずれも、前掲『同志社百年史 資料編一』六七六―六七七ページ。

- (26) 前掲『鏡町史（下巻）』一〇八一―〇九および九九〇―九九七ページ。なお渡瀬常吉については、弁舌にすぐれ、親切友愛を極めていた。彼が塾長になってから、演説会・討論会・作文などを奨励し、その方面の進歩があった。そして岡

田松生の影響を受けることが甚しかった。名和童山は直接キリスト教に反対はしなかったが、けじめをつけて塾長を退けた。そして渡瀬は大江義塾に去つたとある。花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』（ベリかん社、一九八二年）三〇七ページに、塾生として渡瀬巍五郎（常吉）の名が出ている。

- (27) 門人名録には「郡淳」とでており、また前掲『徳富蘇峰と大江義塾』二五〇―二五一ページにも、郡淳として大江義塾の塾生で名があがつており、その説明の中に、大江義塾を退校して、同志社に進んだ、とあるので、字は違うが同一人物と考えた。

- (28) 前掲『鏡町史（下巻）』一〇〇四―一〇〇七ページ。
- (29) 同前、一一六―一七ページ。
- (30) 前掲『徳富蘇峰と大江義塾』二六一ページ。
- (31) 前掲『日本組合熊本基督教會沿革』一五ページ。
- (32) 長谷川真『日本脱出記・ロサンゼルス田代ドクター』（青磁社・一九七八年）八八―八九および一〇三ページ。
- (33) しかし彼に関する他の記録はすべてカンダになっている。例えば、前掲『同志社百年史 資料編一』の「生徒族籍氏名一覧」にも、彼の名前は、「カ之部」に出ている。
- (34) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集第一巻』（同朋舎、一九七八年）六〇五ページ。
- (35) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集第三巻』（同朋舎、一九七九年）六〇ページ。

- (36) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集第四巻』(同朋舎、一九八〇年)二三八ページ。
- (37) 同前、四五—四五四ページ。
- (38) 布哇日々新聞社編『布哇成功者実伝』(一九〇八年)五〇—五一ページ。
- (39) 飯崎吉太郎編『牧野虎次先生自叙伝』(一九五五年)一二ページおよび略歴。
- (40) 同前、略歴。
- (41) 外務省外交史料館所蔵「明治二九年至三三年神戸渡航合資会社業務関係雑件第二巻」江口楨次郎履歴書。
- (42) 川添樫風『移民百年の年輪』(同刊行会、一九六八年)二五八ページ。
- (43) 前掲『徳富蘇峰と大江義塾』二三五ページ。
- (44) 注(41)に同じ。
- (45) 注(42)に同じ。
- (46) 前掲『肥後文教と其城府の教育』四九二ページ、および「熊本における教育と宗教との衝突」七七ページ。
- (47) 福田令寿『百年史の証言』(熊本日日新聞社、一九七一年)七七ページ。
- (48) 前掲『肥後文教と其城府の教育』四九五ページ、「熊本における教育と宗教との衝突」七七ページ、「熊本県教育史中巻」二九八ページ。
- (49) 前掲『ハワイ島日本人移民史』三三七ページ。
- (50) 注(41)に同じ。
- (51) 曾川政男『布哇日本人銘鑑』(同刊行会、一九二七年)一六三ページ。前掲『移民百年の年輪』一六三ページ、『ハワイ島日本人移民史』二〇八ページ。
- (52) 相賀溪芳(安太郎)『五十年間のハワイ回顧』(同刊行会、一九五三年)一三九ページ。他に、前掲『新布哇』附録、九ページ。前掲『ハワイ島日本人移民史』二〇八ページには「福岡県筑紫郡堅木村」となっているが「堅槽村」の誤りであろう。また、前掲『布哇日本人銘鑑』一六三ページには「福岡県福岡市外住吉」とあるが、現在、福岡市内で堅粕の近く、おそらく同じ所を指したものであろう。
- (53) 『蘆花全集第十九巻』(同刊行会、一九二九年)にも所収。
- (54) 前掲『蘆花伝』一八六ページ。中野好夫『蘆花徳富健次郎 第一部』(筑摩書房、一九七二年)一三一ページ。
- (55) 『蘆花全集第二十巻書翰集』(同刊行会、一九三〇年)所収、一〇—一二ページ。
- (56) 前掲『徳富蘇峰と大江義塾』二六〇—二六一ページ。
- (57) 前掲『京都教会百年史』一一四—一一五ページ。
- (58) 『基督教新聞』第四一五号(明治二十四年七月一〇日)。
- 同志社神学校卒業生任地左の如し
- | | | | | | |
|-------|------|----|----|------|------|
| 相澤駒之丞 | 陸前 | 仙臺 | 相澤 | 虎治 | 陸中金崎 |
| 花田岩五郎 | 因幡鳥取 | 橋南 | 浩 | 丹後舞鶴 | |

久保莊三郎 但馬出石

三谷久太郎 大和奈良

小笠豐太郎 攝津尼ヶ崎

曾我部匹郎 大和郡山

湯名礪一良 東京下名

文台 番番 亞各

食
一
主
人
女
且

四年一月六日)。

發、到着を正し、ものとした。

(70) 前掲『新布哇』附録、二

⑦1 前掲『恩寵七十年』一一四—一二五ページ。

(72) 前掲『奥村牧師説教集』一八一—一八二ページ。

(73) 荻野吟子女史顕彰碑建設期成会『荻野吟子』(瀬棚町、

一九六七年) 三四ページ。

130

きたい。曾我部、奥村についても、伝道以外どういう活躍があったかについて、そのあらましにふれておく。

① 奥 亀太郎

彼は先述のように、一八九二年（明治三五年）六月、岡部次郎と共にハワイに渡航したが、『三十略史』によれば、まずハワイ島ホノム地方に伝道を開始している。同書のホノム基督教会の項に「千八百九十二年九月に至て。初めて奥亀太郎氏来て定住伝道をなすこととなれり。氏は僅かに数ヶ月にしてホノルルに転じ⁽¹⁾」とある。同年十二月、ホノルルのヌアヌ教会のメソジスト派砂本貞吉が辞職したため、その後任としてオアフ島に赴いている⁽²⁾。また、同じオアフ島のエワ耕地にも出張説教している⁽³⁾。翌九三年一月一三日付で、彼は『基督教新聞』にハワイ伝道の概況を報告している。自分のことその他、ヒロの岡部、同じハワイ島のホノムにおける峯岸繁太郎、マウイ島パイヤの江上源三、カワイ島リフエの高森貞太郎などについてである⁽⁴⁾。岡部も同年一〇月六日『基督教新聞』に「布哇通信」を送っているが、その中で奥の活動ぶりについて次のように紹介している。

奥亀太郎氏は首府ホノルル府を以て中心となしオアフ島に伝道し居れり、元来ホノルル府の教会は多くの変遷を経しのみならず、種々異なる職業身分を有する、人々より成れること故牧会の困難なるは云ふ迄もなく加ふるに美以教会の下に養育されし信徒多かりしを以て多少の衝突あるを免かれず、奥氏赴任の際は牧会上如何あらんとわれも人も聊か気づかい居りしにさすがは経験深き奥氏の事故、忽ち異分子の一致を全ふし將に一大運動を試みんとするに当て米国桑港より松田氏来りて別に美以教会を設けしものから従来同教会の下に養はれし信徒中多く去て松田氏の教会に属するに至れり、然れども奥氏は少しも失望せず二三の信徒と共に専心一意働かれしを以て未だ数月ならざるに旧に倍するの盛大を来たし去六月小生出府の際男女十三名新たに加入するに至れり⁽⁵⁾（以下略）

しかし同年一二月、日本人伝道本部をホノルルに置いた関係もあり、岡部はホノルルに移り、奥がヒロに行った⁽⁶⁾。

その数ヶ月後、奥は辞職する。⁽⁷⁾『基督教新聞』（明治二十七年五月四日付）杉山重義氏の近信によれば、「同氏同国に滞在中は専らハワイ島ヒロ市の日本人教会を担任せらるゝことゝなり去月十日頃同地に赴むかれし筈なり、因に云ふ是迄ヒロ府に居られし奥亀太郎氏は同会を辞し、近々米国に赴かるへしと」⁽⁸⁾。奥のハワイ在任は、わずか二年足らずであつた。

彼の帰国後の活動については、「奥亀太郎は京都市立第一商業の教諭をつとめる」⁽⁹⁾とある。現京都市立西京商業高校記録によると、彼は教諭として、一九〇二年四月一日付着任（京都市立商業学校）、一九一六（大正五年）四月二日付退職（京都市立第一商業学校）。その間一四年である。講演部の顧問であつたらしく、演説会でしばしば「所感」を述べている。『京商八十八周年記念誌』の「大正初期に於ける先生の印象」と題する卒業生の座談会の記事には、彼は英語の先生であつたが、「浅井先生と不評の点に於て双壁、全身これ肝と胆、エネルギッシュな力強い英語、流暢ではなかつた。怒られた時の凄さは時に腕力沙汰も辞さぬが如く非常に恐れられた」というふうに評されている。彼の人柄がしのばれて興味深い。また同校の『同窓会雑誌』の記事から拾うと、「大正四年四月一六日 奏任待遇」、「大正四年一〇月一日 從七位に叙せられる」、「大正五年当時の住所 一条通室町東入ル」とあり、同志社のすぐそばである。同志社と何らかのつながりをもっていたのだろうか。彼について、今後なお追跡することが必要である。

② 高森貞太郎

『三十年略史』の一八九二年の項に、「十二月高森貞太郎。江上源三の両氏日本より来着。高森氏はカワイ島リフエに赴任し兼ねてコロアに伝道し」⁽¹⁰⁾とある。リフエはカワイ島の中心である。先に紹介した奥のハワイ伝道の概況

(一八九三年一月一三日付)にも彼のことが書かれており、カワイ島において伝道師は彼のみとある。⁽¹¹⁾ また同年一〇月一三日の岡部次郎による「布哇通信(続)」には、江上とともに彼の活動ぶりが記載されているので、次に紹介する。

同志社出身の江上源三、高森貞吉⁽¹²⁾の両氏は布哇国伝道局の聘に応じて日本より来り、江上氏はマウイ島に抛りパイヤを本城となしハマコボコ、グローブランチ等の諸耕地に働き居れり赴任以来日猶浅きも既に十数名の受洗者を見るに至れり、高森氏はカワイ島に在リフイを以て中心となし熱心鋭意福音を伝へ居るなり両氏とも年猶若し皆初陣の事なれば何となく案じられしが先々月小生諸伝道地巡回の際共に談論して両氏とも勇気勃勃々幸福と満足の裏に働かるるを知り大に安心いたしたり⁽¹³⁾

なお、『三十年略史』のリフエ基督教会の項に「千八百九十三年一月高森貞太郎氏の来赴を見るに至れり。伝道漸く緒につかんとするとき。高森氏は病を得翌年十一月辞して帰朝⁽¹⁴⁾。」とあり、彼はわずか二年足らずしかハワイに在住しなかった。彼に関する手がかりが何か得られないかと、筆者は一九八五年八月熊本調査の帰途、彼の出身地を訪れた。教育委員会や城家の人達の話からは何も手がかりはなかったが、彼が母の雪恵(明治一五年死亡)の墓を一九四〇年(昭和一五年)五月に建立していることがわかった。

③ 江上源三

彼は『三十年略史』によると、高森と同じ一八九二年(明治二五年)一二月に渡航し、マウイ島パイアに赴任。「千八百九十三年一月布哇伝道会社は江上源三氏を送て道を伝へしむ。千八百九十五年四月江上氏はワイルクに転じた⁽¹⁵⁾。」とある。さきに掲げた奥のハワイ伝道の概況(一八九三年)には、高森と同様に、マウイ島における伝道師は江上ただ一人と報告されている。⁽¹⁶⁾ また岡部の「布哇通信(続)」による、彼の活動ぶりは高森のところで紹介したとおりである。

『三十年略史』には、ついでワイルク基督教会の項に、「千八百九十五年四月江上源三氏布哇伝道会社より送られ。来て伝道を開始し。翌年秋会堂を新築す。⁽¹⁶⁾千八百九十八年五月江上氏職を退き⁽¹⁷⁾」とある。ただ彼の伝道は一八九九年(明治三二年)一月二〇日の「布哇通信」によると、「十月三十日(一八九八年—筆者注)の安息日⁽¹⁸⁾ワイルク教会(主任者江上源三氏)に於て二大礼典を執行し、男耆名女耆名受洗入会せり、男は無頼漢にて、女は淫売婦なりしが孰れも多くの罪を悔改めて主を信じたり⁽¹⁹⁾」と見え、また、同年六月二日付の通信には「ワイルク教会 四月十四日の夜当教会堂に於いて江上氏司会、オー・エチ・ギュリーキ氏、エム・エル・ゴルドン氏の演説あり、聴衆百余名頗る盛会、終りに懇親会の催しありたり⁽²⁰⁾」とあって、一八九九年の前半は、彼の活動はまだ活発である。なお、同年二月一五日付、松籟生の「在布哇日本人基督教界觀察(同年十一月初日誌す)」によれば、「ワイルクは江上源三氏免ぜられ後任未定⁽²⁰⁾」とあり、この秋ワイルクの伝道をやめたことが知られる。

その後の彼については、一九三〇年(昭和五年)伊庭湖崖が『基督教世界』にのせた「カルホルニヤ沿岸及ホノルの活動(下)」なる記事に、「亦同志社の同級生の一人にて江上源三(岡田松生氏令弟)氏多年消息不明なりしが、ホノルの近くに生存しをらるゝとの消息を知りて喜ぶ⁽²¹⁾」とある。したがって、彼はまだハワイに在留していたことが知られる。

④ 神田 重英

彼の伝道師としての記録は、『三十年略史』にみられる。一八九三年の項には、「十一月神田重英氏来着。ハワイ島コハラに赴任。同地はユニオン教会牧師オースツロム氏夙くより同胞に道を伝へんと志し。同地駐在ドクトル毛利伊賀氏の助力を得て。日曜学校を開始し居たるを以て。飲んで神田氏を迎へ大に援助を与へらる⁽²²⁾」とあり、また、コ

ハラ基督教会の項では、「千八百九十三年十一月神田重英氏来て定住伝道し。オーストロム牧師は諸種の便宜を与へて大に之を助けたり。氏職に在る八年。其間現在の教会堂を新築す。千九百一年八月職を退きて」⁽²³⁾とある。この間、彼はコハラに日本語学校を開設している。『ハワイ日本人移民史』では、「ハワイ最古の日本語学校」という見出しで取り扱っている。

記録にある布哇最古の日本語学校は神田重英牧師により明治二六年（一八九三）布哇島コハラのハラワに於ける官立学校々舎を借り受け日本語学校を開校したのを挙げる事が出来る。

当時コハラ耕地契約労働者桑原秀雄は体力弱く労働に堪えかねていたのを神田師が『耕主に交渉して解約せしめ手元に置いて書生代りをさしたるが、桑原氏は日本に於いて正教員の資格を有する事を知り其れに案を得て日本語学校を設置し教師に任せしめた。生徒三十数名、毛利伊賀が此の地を去りし後は監督官の役迄果した云々』（神田師稿、布哇報知一九三五年所載）⁽²⁴⁾とある。

日本語学校の一八九三年開校説については、それを証拠だてる記録は残念ながら今のところ見当らない。しかし『布哇成功者実伝』には、「布哇島コハラに赴任せり、在勤二年の後大いに鑒みる所ありて子弟に善良なる教育を施さんと欲し学校を設立せり、蓋し同地方の嚆矢なり」⁽²⁵⁾とあって、在勤二年は一八九五年にあたる。当時のハワイの新聞記事から拾うと、『やまと』の一八九五年一月一日付記事に「馬哇島^{マウヰ}クラの景況」⁽²⁶⁾として「本年五月に開設したる日本人学校あり生徒の数は二〇余教師は美似教会の五味環氏にて」⁽²⁷⁾云々とあり、これが一番古い。次いで、同じ『やまと』の九六年五月五日付の奥村多喜衛のホノルル日本人小学校の記事がある。さて、神田の「コハラ日本人小学校」の記事は『やまと新聞』の九六年一月一二日付で、「コハラの天長節と教会堂捧堂式」の記事とともに、次のように報じられている。「当地在住の神田牧師主唱者となり其他の有志者之に加はり目下小学校設立の計画あり遠からず好結果を見るに至るべし」⁽²⁸⁾当時のこの報道にもとづけば、コハラ日本人小学校はハワイで第三番目の

学校になる。『ハワイ日本人移民史』では、さらにホノルル日本人小学校の場合、教師の桑原秀雄をコハラから迎えた事実をあげている。⁽²⁹⁾ 確実な証拠がなければ、コハラ日本人小学校を最初というわけにはいかないが、日曜学校程度の小学校が一八九三年すでにコハラに存在していたのかも知れない。当時そろそろ各地に小学校が出来始める時期であつたと思われる。

さて、コハラ在住中彼は小学校とともに幼稚園も設立している。『布哇成功者実伝』によれば「幼稚園設立に要せし費額は一千三百弗なりしが皆悉く邦人の寄附金にして白人よりは一仙も寄附を仰がざりしと云ふ以て君が如何に同胞間に信用ありしかを証すべし」とある。⁽³⁰⁾ また、この間『やまと』や『やまと新聞』に、彼に関する記事がしばしば出てくる。九六年五月一四日付では、昨日キナウ号でホノルルに出てきたこと、⁽³¹⁾ 同年一月一九日付では、江口一民等と日本に帰ったこと、⁽³²⁾ 九八年五月二六日付では、コハラよりホノルルへ出てきて目下滞在中であることなどである。⁽³³⁾

ところで、彼が一九〇一年（明治三四年）伝道師をやめた理由であるが、既出の『布哇成功者実伝』によれば、「伝道上につき一篇の意見書を申し布哇伝道会社に提出せしも用ゐられず為に断然冠を掛けて現職を辞し」とある。その後の彼を同書によって年表風に整理すれば、次のようになる。

一九〇一年（明治三四年） 遊学のため渡米し加州大学に入り勤学七カ月にして学資欠乏、一時廃学の止むなきに至る。

後、ニューヨーク生命保険会社社員となり、ハワイに被保険人を募集せんがため一旦帰布する。

一九〇五年（明治三八年） パシフィック保険会社に移す。

一九〇六年（明治三九年） マウイ島ワイルクに移す。

一九〇七年（明治四〇年）五月 ワイルクにて馬哇報知新聞⁽³⁴⁾発刊。

さて、この『馬哇報知新聞』の発行については、他の資料は、すべて一九〇九年発刊となっている。例えば『海外邦字新聞雑誌史』によると、「明治四十二年（一九〇九年）頃、同じく半週刊（週二回―筆者注）石版刷の「馬哇報知新聞」といふのが、神田重英によって、マーマケット街の其社から創刊された。記者には佐々木清次が居ったが、此新聞もそれほど永續きはしなかった⁽³⁵⁾」とある。一九〇九年とすれば、江口一民の『布哇殖民新聞』の発刊と同年である。しかし、『布哇成功者実伝』の刊行が一九〇八年であるので、一年後の新聞発刊というのも不思議である。

また、彼は女子の学校「香蘭女塾」を経営する。これについては『布哇日本人発展史』に次のようにしるされている。

香蘭女塾は馬哇島ワイルク町に在りて明治四十四年九月神田重英氏夫妻の同胞の女兒を預り養育するに至りし者抑も香蘭女塾の創始にして、爾來子女を托するもの次第に増加し翌四十五年八月二棟の家屋を購入し之れを修繕し塾舎に充て専ら之れ等子女の育英に努力し遂に今日の發展を見るに至れるものなり

同塾は創立以來既に百一名の子女を育成し卒業せしめたるものにして現在子女の收容数は四十二名を有す、而して同塾は昨大正三年一月地方特志家の内外人より三千八百余弗の寄附を仰ぎ新たに高壯なる三階建の塾舎を新築するに至れり、神田氏の如き既に創立以來一千三百四十余弗の私財を塾の爲めに投じ専ら同胞子女の爲めに献身的に尽瘁しつつありしと云ふ、又以て氏等夫妻の斯業の爲めに獻げし功績歿す可からず而かも己人の経営にして斯る有益なる設備を有する馬哇島に於ける在住同胞たるもの亦幸福ならず哉⁽³⁶⁾〔以下略〕

香蘭女塾の創設の年代については、一九〇九年（明治四二年）ハワイの全島日本人名録には、すでに次のような記述が見られ、創設のさらにさかのぼることが知られる。

マウイ島ワイルク

神田 重英 北海道⁽³⁷⁾ 保険代理人

神田 すす子 同 香蘭女塾長

大竹 みせ 福島 同教師⁽³⁸⁾

これによれば、すす子夫人が塾長になっていることが注目される。彼女について、次のような記述もみられる。

桑原「秀雄——筆者注」氏がホノルルに転出する前、神田氏は日本に於ける女子教育に最高の資格ある才媛スエ夫人を室として迎え、コハラに当時としてはりっぱな校舎を新築し寄宿舎も設けた。後馬哇のワイルクに移り、香蘭学園を設立⁽³⁹⁾。

彼女は専門の教師であつたらしい。学校を設立した理由の一つにこのこともあげられよう。それはともかく、神田重英はこの学校の関係で、馬哇教育会の一九一五年～一九一七年の会長、一九二〇年～一九二三年の理事に就任している⁽⁴⁰⁾。

なお、相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』には、特に「仏国戦線と神田重英」と題する項目がある。ここではその経歴について、「神田氏は第一世であり、同志社出身の牧師として、長くハワイ島コハラその他の同胞間に伝道し、後には保険事業に従ひ、夫人と共にマウイ島ワイルクに香蘭女塾を経営し、育英の聞え高く、一面極めて覇氣と友情に富み、自分「相賀——筆者注」とは常に意気投合した間柄であつた」とある。仏国戦線の件については、アメリカが第一次世界大戦に参戦し、フランス戦線への赤十字社篤志奉仕者を募つた時、彼は日本人として唯一人同地に赴いて活動した。長い引用であるが次のようである。

アメリカが参戦と共に、フランス戦線への赤十字社奉仕者を募つた時、神田氏はすでに十四年間も、米国の庇護の下に生活

し、四児の教育を受けし恩義に酬ゆる一端として、直に自らそれに加はるべく決意したのであるが、ホノルルの赤十字社本部では、その出願を容け入れなかった。

そこで神田氏は自ら家族及び学校のこと等、後顧の患なきやう処理し、万一の事を慮りて自己の葬儀までも営み、一九一八年五月七日単身渡米し、首都ワシントンに赴きて渡仏に就て運動せしが、国務省は氏の出願を却下した。ニューヨークの英国領事館も、六回までもその渡英を許さなかつたが、漸くのことゝで旅券のヴィゼーをして呉れた。

七月五日ニューヨークを発つてロンドンに着いたところ、今度はそのフランス領事が、又どうしても氏のフランス入りを拒絶した。氏は根気よく七回も出願したが、赤十字社の者以外は許さぬと云ふ。

不撓不屈なる神田氏の此の念願が、やつとのことゝで赤十字社総裁ギブソン氏の耳に入り、ワシントンとの幾回かの交渉の結果、初めて赤十字社への奉仕者として受諾され、その目的を達することが出来た。

その後の神田氏は一九一八年七月より翌年七月まで、戦地に於ける米兵の爲め、献身的に有らゆる仕事に従事し、その功勞を認められ、二つ星のサーヴィス・リボンを授与されるに至つたが、神田氏こそはアメリカよりフランス戦線に赴きし赤十字社の唯だ一人の日本人であり、且同地に於ける米國赤十字社奉仕者中の唯だ一人の外国人であつたそうだ。

当時ハワイに於ける第一世及び第二世が大戦に対する心意氣と、如何にしてその居住國であり、又は出生國であるアメリカの爲め、それに酬ゆる万一の奉仕を尽くそうかと思つていたことは、みな此の通りであつて、神田氏はその最も著しい例である。⁽⁴³⁾

以後の彼の活動については、なお十分追跡しえないでいるが、一九三三年よりハワイ伝道に従事した同志社出身の重松柁太郎牧師（在ホノルル）の話によると、重松はその年、神田を訪ねて、ホノルルのホテルに会いに行つたことがあり、「体の大きい人であつた。日本に帰國後、亡なられた」と筆者にその消息の一端をもらしてくれた。

⑤ 江 口 一 民

彼のハワイ渡航は、履歷書によれば一八九三年（明治二十六年）十月である。⁽⁴²⁾ 岡部の「布哇来信」によれば、岡部が同年一二月ヒロよりホノルルに移つた際、「江口一民氏余を助けホノルル府に留まり」とある。⁽⁴³⁾ 『三十年略史』によれ

ば、その間、彼は奥と同様、エワ耕地に出張説教している。⁽⁴⁴⁾それから、カワイ島に赴くことになる。同書によれば、「一八九四年四月に至つて江口氏マカベリ（マカウエリ）に來り。本拠を同地二番館府^{ヤン}に置き、ハナペペには出張伝道することとなれり⁽⁴⁵⁾」と見える。そして九六年十一月辭職するまで約三年間布教に従事した。その間、ホノルル・ヌアヌ日本人教会の大演説会で、同じカワイ島の山崎直らと演説（明治二九年六月七日）を行なつたりもしている。⁽⁴⁶⁾ところが履歷書によれば、彼は伝道師より一變して、実業に移つたことが知られる。すなわち「加哇島^{カワイ}マカウエリー耕地布哇製糖会社ト特約ヲ為シ製糖事業ニ従事、全年（明治二九年——筆者注）十二月帰朝ス⁽⁴⁷⁾」と見え、『やまと新聞』にも一月一九日彼の帰朝の記事がみられる。⁽⁴⁸⁾彼は日本に歸つて、自分の手で移民会社を作ろうとしたようだが果さず、⁽⁴⁹⁾「明治三十年七月二二日東洋移民株式会社布哇国代理人トナリ全年十月十四日解任⁽⁵⁰⁾」となつてゐる。

一八八五年（明治一八年）に始まつた官約移民は、九四年六月にホノルルに入港した第二六回船三池丸をもつて廃止となり、九四年四月から私設移民会社の取扱いによる移民の渡航が始まつた。これ以後一九〇〇年六月の契約移民廃止までを「私約移民時代」と呼んでゐる。⁽⁵¹⁾各移民会社は政府の許可を得て、各方面に移民募集の運動を為し、渡航費および上陸の際の「見せ金」を貸し付けて、移民をハワイに輸送し、ホノルル市フォート街、マーチャント街に各社共同の事務所を設け、ホノルルにある全島砂糖会社の各代理店と接触を保ち、日本から来る新しい移民の配布を行なう組織で、移民会社はその間に立つて、移民と砂糖会社の双方から手数料をとり、汽船会社からは移民輸送の船賃の割戻しを受けて莫大な利益を得た。⁽⁵²⁾東洋移民株式会社は、旧熊本移民株式会社とよばれ、明治二九年に創設されたものと思われる。

さて、江口はこの移民会社解任直後、また神戸渡航合資会社のホノルル在留代理人に任用されてゐる。⁽⁵³⁾そして『や

まと新聞」の記事では、彼は九七年一〇月二七日、旅順丸にて再びホノルルに上陸⁽⁵⁴⁾し、ハワイの人となった。その後彼は耕地での請負事業を行なったとあるが、詳しい活動ぶりは不明である。また一九〇三年一月三〇日、ハワイの中央日本人会、第一回代議員会が開催されたが、各島からの代議員五八名の中に、彼の名が見える。「代議員、二五番、ハワイ島ヒロ、通弁、熊本、江口一民」⁽⁵⁵⁾とある。代議員はそれぞれの地方の重鎮と目されていた人々である。

彼はその頃ハワイ島ヒロにあって通弁を業として重きをなしていたと思われる。彼は幾多の事業に失敗した後、当時の移民社会を指導するのに新聞以外はないと、神田の新聞と同時期にヒロ市において週刊の日本字新聞を発刊する。一九〇九年五月七日創刊の『布哇殖民新聞』である。創刊号には、日本練習艦隊司令官伊地知海軍少将の題号、江口自身の筆になると思われる「発刊の辞」、「本紙の内容」についての説明、彼の恩師である国民新聞社の徳富猪一郎の祝電などがみられる。第二号には、曾我部四郎の祝辞ものせられている。この新聞の事業も経営困難で、一九一三年（大正二年）一月、債権者より差押えをくい、一時休刊したこともあった⁽⁵⁶⁾。再刊して間もなく、今度は彼自身が病気になる、ついに一九一四年四月二一日永眠、働き盛りの四四歳であった。『布哇殖民新聞』も同年四月二四日、終刊号を出している。彼の人生は、まさに波乱万丈であった。

なお、彼の弟、江口義民も兄の影響を受けて、一八九七年ハワイに渡航。ホノルルにて写真の技術を学び、九九年ヒロに渡り、写真店を開業して成功、後に同地の日本人間の重鎮となった⁽⁵⁷⁾。

⑥ 曾我部 四郎

彼は、一八九四年（明治二七年）三月二一日、布哇伝道協会の招聘によりハワイに渡り、数日岡部牧師とともにホノルルで過ごし、キナウ号でハワイ島ヒロに渡った⁽⁵⁸⁾。ちょうど辞職渡米する峯岸繁太郎の後を継いでホノムに赴い

た。多分四月のことである。⁽⁶³⁾『三十年略史』のホノム基督教会の項には次のようにしている。

千八百九十四年四月曾我部四郎氏の来り。峯岸氏の後を継いで伝道に就事す。牧会の傍ら保能武義塾を起し。幾多の子弟を寄宿せしめて育英の任に当り。或は有為の青年を集めて敬天の道を講じ。二十有四年教へて倦まず。義塾の出身者今や全島に散在す。ホノムの外にハカラウ、ペペケオ両地に出張し伝道をなす。ホノム教会は千九百十一年自給教会となり。曾我部氏は千九百十五年按手札を領す。「中略」日曜学校はホノム、ペペケオ、ハカラウ三ヶ所に開設せられ。生徒総數七十名。ホノムは二組、ハカラウ二組、ペペケオ一組にして五名の教師分担す。校長は煤孫民江氏。⁽⁶⁴⁾

彼は、ホノムに赴任してから、死に至るまで同地より離れず、牧会および育英事業のみに尽し、他の何の事業にも関係しなかった。相賀溪芳は『五十年間のハワイ回顧』において、神田と同様とくに「ホノム聖人曾我部四郎牧師」なる項目をもうけ、彼こそ本当に牧師らしき牧師にして、それでいて彼は極めてリベラルな性質にて、他宗の人に対しても、少しも城府を設けず、毀誉褒貶全く意に介せず、渾然として長者の風を持している、と評している。⁽⁶⁵⁾

なお、彼がホノムに赴任した頃の伝道師の仕事はどういうものであったのかを、彼自身の回顧録より、次に紹介しておく。

伝道師だといったところで今日のように、サンデーの説教だ、ウエンスデーのプレイヤ・ミーティングだ、家庭訪問だといったようなとは違つて、領事館の掛合、正金銀行の送金、横浜ジャパンの代筆から、引つきりなしに起った夫婦喧嘩の仲裁、耕主への交渉一切の事の相談相手でもあり、村長のようでもあり、我の如きは、今日では何一つ自分でせず、オートモデルのドライヴすら出来ない男になってしまったが、その当時では天長節のような時には、詩吟や剣舞劇までも教えたものである。⁽⁶⁶⁾

当時は、伝道師としての仕事のみならず、日本人移民の相談相手として、いろいろな仕事をやっていたことがわか

る。

彼が創立、経営した「保能武義塾^{ホノム}」については、神田の「香蘭女塾」と同様、『布哇日本人発展史』に、次のように記載されている。

ホノム義塾は布哇島ホノムの地にありて基督教伝道師曾我部四郎師の経営に係る所にして氏は京都同志社出身にして明治卅七年始めて布哇に來り、曩に伝道師たり奥龜太郎峰岸繁太郎氏等の後ちに同耕地に赴任以來同胞の風俗頹廢を極め何等の節制と道念の感なきを慨し一身を獻げて之等の同胞と救済せんと志し布教伝導に従事すると同時に同胞児童教育の必要なるを認め、布哇伝道会社の補助を仰ぎ明治三十年十月日本人小学校を創立し十七名の生徒を以て教授し同年十二月には寄宿舎を組織して同夫人と共に家庭教育を授け明治三十八年頃に至りては生徒百五十名寄宿舎生百名の多きに達したり、當時本願寺布教場新たに設立し同時に小学校寄宿舎等も設けたる結果として一時生徒寄宿生をも減少を見るに至れりと雖も更に倦む所なくして明治卅九年より青年をも收容し併せて之を薰陶し多年一日の如く献身的に育英の事に尽瘁努力しつつあり、同校より男子三人を京都同志社に送り女子五名は既に同社女学校を卒業せしめ又ヒロ、ボーデング、スクールの中学校を卒業せしもの二名を出す等同義塾は既往六百の青年子女を收容し五十名の卒業者を見るに至れり、卒業者の中には既に職を求めて夫々相當の産を興し身を立てし者も尠からずと云ふ、地方在住同胞の子女を送りて教養を托するも亦頗る多しと謂ふ⁽⁶⁷⁾現在生徒総數四十名内外を有す

同義塾は曾我部夫妻の外煤持夫人中野梅代他一名に依り経営教授しつつあり〔以下略〕

なお保能武義塾の設立当時の景況については、『やまと新聞』一八九六年（明治二十九年）一二月二四日付の記事に、「曾我部牧師は只今在府中なるがホノムにては同氏の尽力により日本人教会堂を新築し小学校を設け幼稚園を置くの運びに至れるとの事⁽⁶⁸⁾」と見える。また、一九〇九年（明治四十二年）の全島日本人名録には、

ハワイ島ホノム

曾我部四郎 福岡 牧師

曾我部しか子 同 ホノム義塾教師
煤孫民江子 京都 同⁽⁶⁸⁾

と、曾我部夫妻を含めて三人の名が記されている。なお、曾我部夫人は、同志社の看病婦学校の卒業で、「明治廿六年度 看病婦学校（十人）中川鹿 愛媛県」と、その名が残されている。曾我部はハワイに来てから彼女と結婚したが、一九二〇年（大正九年）彼女を亡くした。また、保能武義塾も事情のため移転を余儀なくされ、彼はこの機会に夫人を記念する講堂新築を思い立ち、その費用三千弗を集めるため、『もう三千弗』（一九二六年）なる書物を著わした。彼には『皇室と基督教』（丁未出版社、一九二七年）なる書物もある。彼の晩年のことについての資料は、今のところ見当たらない。彼はハワイ在住五十五年の後、一九四九年（昭和二十四年）七月三日昇天、享年八四⁽⁷¹⁾。彼の死を看取った又吉医師は、重松柱太郎牧師（在ホノルル）の義理の弟である。曾我部夫妻はヒロのホメラニ墓地に眠っている。

⑦ 奥村多喜衛

彼はハワイにおける最も著名な日本人牧師である。その生涯、思想、事業については別稿を期しているので、ここでは、そのおもな事業だけをあげるにとどめたい。

彼は、一八九四年（明治二十七年）ヌアヌ教会副牧師に就任、翌年岡部次郎が世界周遊の旅に出たあと、同教会牧師となる。一九〇四年マキキ教会を設立。この教会は後の一九三二年（昭和七年）、彼の故郷の高知の城をモデルに建てたマキキ聖城教会となる。彼はその他、一八九六年（明治二十九年）オアフ島最初の日本人小学校を創設、また日本人基督教青年会、日本人病院、禁酒同盟の設立などさまざまな社会事業を通してハワイの日本人の地位向上につとめた。

一九五一年（昭和二十六年）二月一〇日、ハワイで永眠。八六歳であった。⁽⁷³⁾

⑧ 佐々倉 代七郎

彼は、一八九四年（明治二七年）五月四日付の『基督教新聞』によると、「同志社卒業生なる同氏は今般布哇伝道の為め夫人と共に本日横浜発の郵船にて同国に赴かるゝよし」と見え、ため夫人（旧姓川勝—京都出身⁷⁵）とともに夫婦でハワイに渡った。そして、星名謙一郎の後任として、パイコウに赴いた。『三十年略史』には、「熱心に道を説き。或は英語を教へ。加ふるに内外人間に大なる信用と勢力ありし」と見え、また藤井秀五郎『新布哇』には、「氏は資性頗る温雅にして且つ国歌の嗜あり時に触れ玉屑銀唾の人を驚すもの多し、雨洲は即ち其雅号なり」とあり、和歌もよくした。同書の一節に彼の作品が採録されている。

雑詠 佐々倉雨洲

耶子が嶋ヒロは時雨の降りながら

ロワの高根に朝日さすなり⁽⁷⁸⁾

荒浪の寄する岸边に駒とめて

海原のぼる月を見しかな

玉鉾の道ふみ見れば其国の

開けし程も知るべかりける

夜をふかみ月冴え渡る丘の庵に

ひしく胡琴の音のさやけさ

我里はいたく時雨の降りながら

海の面遠く月の照る見ゆ

限りなく群るゝ鷗と見ゆるかな

風吹き荒るゝ大和田の原

自妙のロワの高根に雪見えて

吹く風寒し甘蔗の大原

夕なく鳴く虫の音のゆかしにさ⁽⁷⁹⁾

甘蔗の一むら刈り残しつゝ⁽⁸⁰⁾

彼は約六年の在任の後、一九〇〇年七月辞して帰国したと『三十年略史』は伝えているが、しかし、彼はその後アメリカ本土に渡り、カリフォルニアのバークレーに住んでいる。『在米日本人名辞典』によれば「明治三四年渡米研学、三八年正金銀行に入り勤続、家族妻為、長女洋、次女智慧⁽⁸¹⁾」とあり、『同志社学友会・同窓会・名簿』では、昭和の初め頃も同じ住所で、長女は大正四年同志社専門学部家政科選科卒業後、大正十一年に亡くなっている。⁽⁸²⁾ 彼については、同志社時代の級友であった伊庭湖崖が『基督教世界』に「カルホルニヤ沿岸及ホノルルの活動(上)」として、のせた記事で、一九三〇年(昭和五年)一月一二日(日)、王府(オークランド)組合教会での礼拝後、佐々倉代七郎氏未亡人及令嬢に面会して、亡友の逝去に対する弔辞を述べるとあるので、この頃亡くなったのである。⁽⁸³⁾ う。

⑨ 山崎 直

彼のハワイにおける伝道活動を『三十年略史』の記事より総合してみると次のようになる。一八九四年(明治二十七年)

六月来航。しばらくホノルルに滞在し、江口の後をついで九月頃まで、オアフ島エワに出張説教。十一月高森の病氣
 辞任の後任として、カワイ島リフエに赴く。二年後の九六年十一月江口の辞任後の同島マカベリ伝道をリフエより兼
 任出張し、ハナペペにも出張説教する。翌年二月マカベリに転じたが、まもなく彼も健康を害し辞職帰国。⁽⁸⁴⁾

彼は先輩達の後任として、カワイ島を中心に伝道を行なったが、その期間はわずか三年ほどであった。当時の現地
 の新聞記事から、彼に関するものを拾ってみると、『やまと』明治二九年六月九日付には、ヌアヌ日本人教会の演説
 会において、江口とともに演説を行なっている(六月七日)記事がみえる。⁽⁸⁵⁾ また、『やまと新聞』明治三〇年二月に
 は、「懸賞論文に就て、道德振興策に対して本社は「太陽」一ヶ年半分をカワイ島リフエ在留の山崎直へ贈呈すべき
 に付き」とある。⁽⁸⁶⁾ しかし、同紙の明治三〇年八月一〇日に、彼の帰朝の記事がのせられている。「カワイ島リフエよ
 りハナペペに移られたる伝道士山崎直氏は明後日の便船にて帰朝さるべし」と。⁽⁸⁷⁾

- (1) 前掲『三十年略史』七〇ページ。なお、同書七ページに
 「一八九二年九月岡部氏は奥亀太郎氏を伴ふて帰布し。」と
 あるのは、六月の誤りであろう。
- (2) 同前、二八ページ。
- (3) 同前、三八ページ。
- (4) 『基督教新聞』第四九七号(明治二六年二月三日) 海外
 事情。
- (5) 同前、第五三二号(明治二六年一〇月六日) 海外事情。
- (6) 同前、第五五二号(明治二七年二月二三日) 海外事情。
 岡部生報「布哇来信」。
- (7) 前掲『三十年略史』八ページ。
- (8) 『基督教新聞』第五六二号(明治二七年五月四日)。同
 氏とは杉山重義のこと。
- (9) 前掲『同志社百年史 通史編一』一一二ページ。
- (10) 前掲『三十年略史』七ページ。
- (11) 注(4)に同じ。
- (12) 『基督教新聞』五三三三号(明治二六年一〇月一三日) 海
 外事情。
- (13) 前掲『三十年略史』四四ページ。
- (14) 同前、五九一六〇ページ。

(15) 注(4)に同じ。

(16) 前掲『新布哇』附録、在布日本人出身録一四ページには、「三十年(一八九七年)九月にはワイルク日本人基督教會堂を建設し」とあり、一年ずれている。

(17) 前掲『三十年略史』五四ページ。

(18) 『基督教新聞』第八〇五号(明治三二年一月二〇日)。

(19) 同前、第八二四号(明治三二年六月二日)。

(20) 同前、第八五二号(明治三二年一月一日)。

(21) 『基督教世界』第二四一四号(昭和五年五月八日) 米國通信(八)。

(22) 前掲『三十年略史』八ページ。

(23) 同前、七二ページ。

(24) 前掲『ハワイ日本人移民史』二四七ページ。なお、小沢義淨編著『ハワイ日本語学校教育史』(ハワイ教育会、一九七二年)一六ページにも、一八九三年のコハラ日本人学校が、ハワイにおける日本語学校の嚆矢であるとしている。

(25) 前掲『布哇成功者実伝』五一ページ。

(26) 『やまと』第九号(一八九五年一月一三日)。

(27) 同前、第七五号(一八九六年五月五日)。なお、フランクリン王堂・篠遠和子『図説ハワイ日本人史一八八五—一九二四』(ビショップ博物館、一九八五年)一二九ページにこの時の新聞広告がのせられている。

(28) 『やまと新聞』第四一号(明治二九年一月二二日)。

なお、『やまと新聞』は『やまと』が一八九六年(明治二九年)に改名したものである。

(29) 前掲『ハワイ日本人移民史』二四八ページ。

(30) 注(25)に同じ。なお、前掲『新布哇』附録、八一九ページによれば、彼は日本人間より一二〇〇ドルの寄付金を得て教会堂を建築したとある。

(31) 『やまと』第七八号(明治二九年五月一日)。

(32) 『やまと新聞』第四四号(明治二九年一月一日)。

(33) 同前、第二七二号(明治三一年五月二六日)。

(34) 前掲『布哇成功者実伝』五一—五二ページ。

(35) 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』(学而書院、一九三六年)一〇〇ページ。なお、前掲『ハワイ日本人移民史』四九六ページや田村紀雄・白水繁彦『ハワイ日系ブレス小史(中)』(『東京経済大学人文自然科学論集』第六九号、一九八五年)一八四ページも、一九〇九年発刊となっている。

(36) 前掲『布哇日本人発展史』三九八ページ。

(37) 前掲『新布哇』附録、八一九ページにも、北海道札幌県とあるが、これは先述のように、彼の家族の移住後の住所であり、彼の出身地ではない。従って、前掲『図説ハワイ日本人史一八八五—一九二四』七八ページの写真解説文で、北海道出身とあるのは誤りである。

(38) 前掲『ハワイ島日本人移民史』五七九ページ。

(39) 注(29)に同じ。

- (40) 布哇教育会編纂部『布哇日本語教育史』（同出版部、一九三七年）六一七ページ。
- (41) 前掲『五十年間のハワイ回顧』三〇一―三〇二ページ。
- (42) 前掲、外交史料館所蔵文書。
- (43) 注(6)に同じ。
- (44) 注(3)に同じ。
- (45) 前掲『三十年略史』四八ページ。
- (46) 『やまと』第八九号（明治二九年六月九日）
- (47) 注(42)に同じ。
- (48) 注(32)に同じ。
- (49) 前掲『移民百年の年輪』二五九ページ。
- (50) 注(42)に同じ。
- (51) 前掲『ハワイ日本人移民史』一四五ページ。永井松三編『日米文化交渉史』第五卷「移住」（洋々社、一九五五年）三六四―三六五ページ。
- (52) 前掲『ハワイ日本人移民史』一四七ページ、『五十年間のハワイ回顧』一〇〇―一〇一ページ。
- (53) 注(42)によると、神戸渡航合資会社は、明治二七年創設、神戸市元町通二丁目二八番邸（現中央区）にあり、業務担当人は吉川藤五郎という人物であった。なお彼の履歴書の名前は「江口禎次郎」になっている。
- (54) 『やまと新聞』第一八八号（明治三〇年一〇月二八日）。
 ここでは彼の名前は「江口禎之助」となっている。
- (55) 前掲『移民百年の年輪』二五八ページ。および『布哇殖民新聞』第二号（明治四二年五月一四日）曾我部四郎「祝辞」。青木喜作『布哇人物評論』（青鬼社、一九一四年）二三〇ページ。
- (56) 前掲『ハワイ日本語学校教育史』三六ページ。
- (57) とくに「殖民」なる二字は、永住的な意味をもつことを強調している。
- (58) 前掲『移民百年の年輪』二五九ページ、および『ハワイ島日本人移民史』三四二ページ、『布哇人物評論』二二九―二三一ページ。
- (59) 前掲『移民百年の年輪』二五九―二六〇ページ。
- (60) 前掲『布哇成功者実伝』四四―四五ページ。
- (61) 前掲『ハワイ島日本人移民史』二〇八ページ。
- (62) 同前、一九七ページ。
- (63) 前掲『新布哇』附録、九ページ、および『五十年間のハワイ回顧』一三九ページでは、五月赴任、『布哇日本人銘鑑』一六三ページでは、三月二四日来任とあるが、四月が妥当であろう。
- (64) 前掲『三十年略史』七一ページ。
- (65) 前掲『五十年間のハワイ回顧』一三八―一三九ページ。
- (66) 前掲『ハワイ島日本人移民史』二〇一ページ。
- (67) 前掲『布哇日本人発展史』三九六ページ。
- (68) 『やまと新聞』第五九号（明治二九年一二月二四日）。

- (69) 前掲『ハワイ島日本人移民史』五五〇ページ。
- (70) 前掲『同志社百年史 資料編一』四一〇ページ。
- (71) 前掲『移民百年の年輪』一六三ページ。
- (72) 重松枢太郎牧師による。
- (73) 主として、前掲『奥村牧師説教集』年譜による。
- (74) 注(8)に同じ。
- (75) 『同志社女子専門学校、同志社女学校高等女学部学生会、同窓会、名簿』(一九三〇年)二八三ページ。
- (76) 前掲『三十年略史』六八ページ。
- (77) 前掲『新布哇』附録、一五ページ。
- (78) マウナ・ロア山のこと。ハワイ島南部の高山、標高四、一六九メートル。
- (79) 前掲『新布哇』六四一ページ。
- (80) 前掲『三十年略史』六九ページ。

む す び

これまで各人物ごとに、ハワイ渡航前と渡航以後に分けて記述してきたが、資料の制約のため、人物によって、その精粗がはなはだしくなってしまった。まだまだ多い不明の部分(時期)については、今後さらに綿密な資料探索を行なって埋めていきたい。

全体的なまとめとして、まず問題になるのは、彼等をハワイに向かわせた契機は何であったかということである。

- (81) 日米新聞社編『在米日本人名辞典』(一九二二年)五二二ページ。
- (82) 注(75)に同じ。住所は、1707 Grant St., Berkeley, Cal. U. S. A. 長女の実籍は、群馬県で、彼と同じである。
- (83) 『基督教世界』第二四二号(昭和五年四月二七日)米国通信(七)。
- (84) 前掲『三十年略史』九、一一、三八、四四、四八ページ。なお、前掲『恩寵七十年』一五ページによれば、奥村多喜衛がホノルルに着いたとき、山崎は副牧師をしていたという。
- (85) 注(46)に同じ。
- (86) 『やまと新聞』第八一号(明治三〇年二月)。
- (87) 同前、第一五四号(明治三〇年八月一〇日)。

とくに人間的なつながりに興味を覚える。岡部次郎のハワイ行きの勧誘については彼の兄、太郎が彼等と同世代の同志社の学生であったことも、岡部次郎と彼等と結びつける何らかの役割をもったのではないだろうか。次に渡航前の彼等相互の関係を考えてみよう。全員に共通するのは、同じ頃に同志社に在籍したということである。直接的なつながりがわかる唯一の例は、四条教会の「鶴鳴会」という信仰上の団体で、奥村多喜衛、佐々倉代七郎が参加しており、それ以外にもこの団体からハワイに渡った人達がいた。また奥と曾我部も四条教会に関係している。また、とくに熊本にゆかりのある人物の多いことが注目される。このうち、大江義塾——熊本英学校——東亜学館に連なる関係者がほとんどであるのが興味深い。彼等の中で、直接的なつながりがあったことも十分考えられる。また、ギューリック・ファミリーは、熊本にあつて英学校などを援助し、ことに宣教師シドニー・ギューリックは神田をハワイ伝道者に選んだと記録にみえる。そして、シドニーの伯父、O・H・ギューリックはハワイ生れで、一八八七年（明治二〇年）——一八九二年（明治二五年）宣教師として熊本滞在の後、いったんアメリカに帰り、一八九四年（明治二七年）ハワイに日本人部長として就任。ハワイ伝道に大きな影響を与えている。時期的にみて、熊本にゆかりがある人達とO・H・ギューリックをはじめとするそのファミリー、そしてハワイという結びつきが当然考えられるわけである。

次に彼等がハワイに渡った時代的背景を考えてみよう。奥を除いて、彼等はいずれも明治二〇年代に同志社を出てゐる。ちょうどその頃、ハワイ官約移民が一八八五年（明治一八年）に始まって間もない時期にあたり、新しい日本人移住地に伝道師を求めていたため、それに応じたと思われる。つまり、ハワイの新しい伝道地は日本の伝道地の延長上に考えられたわけである。

渡航後の彼等の活躍のようすをまとめてみると、まず、生涯ハワイにあつて牧師として伝道に従事したのが奥村と

曾我部である。二人は、ともに日本人学校も創立、経営した。また彼等のうち、この二人だけが同志社で別科神学科の出身であるのが、興味深い。牧野虎次はその著の中でこう述べている。

同時代に在学して居た神学生中、特に傑出した人物は、別課神学生であつた。別課と云うは、本課即ち英学校を卒業してから進むコース（教科書は凡て英書）に対し、課目は凡て邦語を用いると云うのであるから、一段卑いコースを指すので、同志社内では少々ひけ目を感じる立場であつた。処が、彼等の内から

長田 時行 片岡 清治 留岡 幸助 西尾幸太郎 奥村多喜衛 曾我部四郎 小北寅之助 野口 末彦
丸山伝太郎 等々

いずれも勝れた人物が輩出したことは、同志社の誇であつた。

日本語で勉強した者が、ハワイで終生牧師を続けたとは皮肉な話であるが、これは單なる偶然であらうか。筆者にはそう思わない。

また、彼等渡航伝道者のうち、ほとんどの者が途中で伝道師をやめてしまったのはなぜだろうか。神田は伝道会社と意見が合わず辞め、高森、山崎は病気で辞職帰国と記録にあるが、総じて、給料にもあまりめぐまなかったのではないかと想像される。江口は移民会社の代理人に、神田は本土に留學後保険会社社員に、佐々倉も本土留學後銀行員に転身している。その後、神田は奥村・曾我部と同じく伝道師時代に行なつた学校経営に従事し、さらに神田と江口は新聞経営に乗り出すというように共通点もみられるのは興味深い。

いずれにしても、彼等とともにハワイの日本人移民社会に大きな影響を与えた人物たちであつた。そしてそれぞれ個性豊かで、波乱にみちた人生を送っており、筆者は一人一人に大きな魅力を感じるのである。

(1) 前掲『三十年略史』八―九ページ。前掲「シドニー・ルイス・ギューリック略伝」二二七ページ。

(2) 牧野虎次『針の穴から』(牧野虎次先生米寿記念会、一九五八年)三九―四〇ページ、「同志同窓の群像」の項。

付記 本稿は「海外移民ならびに海外伝道に関する研究」班において、一九八四年四月二八日の「同志社出身の初期ハワイ伝道者について」と題する報告にもとづき、その後収集した資料を加えて、起筆したものである。杉井六郎教授をはじめ、研究班のメンバーには、御助言や資料収集の便宜をはかっていただいた。また、ハワイのビショップ博物館、国立国会図書館、外務省外交史料館、東京大学明治新聞雑誌文庫、海外日系人協会、明治村、和歌山市民図書館移民資料室、熊本市立図書館、同志社大学図書館、同人文研図書館、同女子中高図書館、熊本市、鏡町、波野村、園部町の各教育委員会、ヌアヌ教会、マキキ教会、緑野教会、福岡磐固教会、熊本草葉町教会ならびに大久保清氏(在ヒロ)、重松征太郎氏(ホノルル)、花立三郎先生(熊本)、の協力を得た。厚く感謝の意を表します。

なお執筆後、次の二点に気がついたので付け加えておく。

一、神田重英の父重雄についてであるが、『丹波基督教教会史』(一九三四年)の明治二十三年に「四月二十六日、亀田、重雄氏北海道移住に付送別会を園部に開く会者十余名」なる記事がある。これはおそらく神田重雄のことではないかと思われる。これが正しいとすれば、彼は留岡幸助が渡道する明治二十四年より先に、北海道に移住したことになる。

二、東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵の『布哇新聞』第二八号(明治二六年一月二七日)には、奥亀太郎が、岡部次郎と交代で、ヒロ教会に転任するため、一月二三日夜、ホノルルのエンマホールにおいて送別会が催され、それがちょうど日本より来たばかりの神田重英が、同じハワイ島コハラに赴任のため、その送別会も兼ねて行なわれたこと。また翌二四日、奥亀太郎はキナウ号でヒロへ岡部次郎と同行したことの記事がみられる。